小泉八雲と周囲の人々

Lafcadio Hearn and His Circle

染　村　絢　子

目　次

はじめに
　Ⅰ　ハーンの略年譜
　Ⅱ　ハーンの東大における英文学講義
　Ⅲ　第四高等学校教授となった教え子たち
　　1　茨木清次郎
　　2　田部　隆次
　　3　大谷　正信
　　4　岸　　重次
　　5　駒井徳太郎
　　6　林　　並木
　　7　長屋　順耳
　　8　西川　　巖
　Ⅳ　ハーンの作品創作の協力者たち
　　1　雨森　信成
　　2　折戸徳三郎
　Ⅴ　P. D. パーキンズ
おわりに

LAFCADIO HEARN
From a photograph by Gutekunst, 1889

［写真１］ラフカディオ・ハーン

はじめに

平成12年春、１か月間、石川近代文学館において、展示会「小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）と石川ゆかりの人々」を、また秋には、10日間金沢大学資料館において、展示会「小泉八雲と教え子の四高教授たち」をそれぞれ開催し、講演を行った。

本稿では、両館で展示した資料から、旧制第四高等学校教授となったハーンの教え子８名と、ハーンの創作活動に協力した人々の中から、雨森信成、折戸徳三郎の２名、そしてハーン没後、ハーン作品の書誌を著したP. D. パーキンズについて記述することにする。

既刊書において発表された一般的事実等については、ハーンの略年譜以外は殆ど省略し、主として茨木家、折戸家から拝借したハーン関係資料、金沢大学附属図書館「岸文庫」「駒井文庫」収蔵のハーン関連資料、及び、私蔵の資料

を中心に記すこととする。

記述は略年譜形式とし、多くの写真を掲載した。これら写真については、既刊書等に発表されていないものを中心とした。62葉中48葉は本稿で初公開の写真である。人名については、敬称を省略したことをお許し願いたい。

（2001．２．９　染村絢子）

Ⅰ　ハーンの略年譜

ハーン　略年譜・来日前

1850（嘉永３）６．27　ギリシャのレフカダで生まれる。父は英国籍のアイルランド人、チャールズ・ブッシュ・ハーン。母はギリシャ人、ローザ・アントニオ・カシマチで長男は早逝。次男ハーンは、パトリック・ラフカディオ・ハーン（Patrick Lafcadio Hearn）。パトリックは、アイルランドの守護聖人、ラフカディオは生地レフカダに由来する。父は、当時ギリシャ駐在の軍医補であった。父と母は祝福されない結婚であった。

1852（嘉永５。２才）父の故郷、アイルランドのダブリンへ母と到着。

1853（嘉永６。３才）父が赴任先からダブリンに帰国。ハーンはこの時、初めて父に会う。ギリシャ生まれの母は、ダブリンで宗教・言語・習慣等の相違から精神的に不安定になる。この頃からハーン母子は、裕福な未亡人で父方の大叔母、サラ・ブレナンの世話になる。

1854（嘉永７。４才）父はクリミヤ戦争に従軍するため、アイルランドを離れたが、懐妊中の母は、ハーンをブレナン大叔母に託してギリシャに帰る。子供がなかった大叔母は、ハーンを跡継ぎにするため養育した。

1856（安政３。６才）父母が離婚。再婚した父は、インドへ赴任。ハーンは父とは生涯で５度会っただけだったという。

1863（文久３。13才）英国のセント・カスバート神学校に入学する。厳正な宗教教育には反発したが、英語の学力は常に上位を占め、文学書を乱読し、詩作に興じた。

1866（慶応２。16才）学校で怪我をし左眼を失明。父、義母死亡。養育者であった富豪の大叔母が破産したため、学校を中退。以後、就学することはなかった。

1869（明治２。19才）一時ロンドンに住むが、経済的理由からイギリスのリバプール港から移民船でニューヨークへ。さらに移民列車でシンシナティーへ。広告とり、校正係、編集助手、郵便局員、日刊新聞の記者、フランス文学の翻訳（ハーンはフランスで学校に通っていたといわれているが、確証はない）等に携わる。

1878（明治11。28才）ニュー・オーリンズへ移る。雑誌社の副編集者、文芸部長となる。

1882（明治15。32才）ハーンの関心が東洋関係の神話や文学に集中するようになる。終生親友として、また心の恋人ともなったE.ビスランドと出会う。ハーン没後、ビスランドは遺族を親身になって世話をした。来日もしている。

1883（明治16。33才）のちに来日のきっかけとなる「ハーパー」社と関係するようになる。

1884（明治17。34才）12月16日から半年間ニュー・オーリンズで「万国工業綿花百年記念博覧会」が開催される。日本政府出展の美術・教育に関する704点に興味(注1)を示し、日本政府派遣の服部一三に毎日会って日本に関する情報を得、「ハーパー」誌に記事を書く。会場で金沢出身の高峰譲吉(注2)と会う。

1887（明治20。37才）カリブ海の島、マルティニークに２年間滞在し、伝説や歌を収集し『仏領西インド諸島の２年間』(1890)を出版。

1889（明治22。39才）P.ローエル『極東の魂(注3)』を読み、最大限の賛美を送る。このことがハーンが来日するきっかけとなった、といわれている。この年P.ローエル

は、石川県能登を旅行し、２年後『能登』を出版。ハーンは「ハーパーズ・マンスリー」誌の美術主任 W.パットンと会い、日本に関する著述について具体的な話をする。

1890（明治23。40才）３．８　挿絵画家 C.D.ウエルドンと共に日本へ向かうためニューヨークを出発。モントリオールを経て、ヴァンクーヴァーから３月18日乗船。

来日後

1890（明治23。40才）４．４　２週間の船旅を終えて横浜港に入港。E.B.クラーク(注4)に数週間、英作文の個人教授を行う。生涯で初めての生徒であった。８月30日、島根県尋常中学校、師範学校の英語教師として松江に赴く。月給100円。

1891（明治24。41才）１月中旬、風邪をこじらせたハーンの世話をするために小泉セツが雇われる。６月22日、松江市北堀町315番地の根岸干夫（たてお）の武家屋敷を借りてセツとともに住む。11月15日、第五高等学校の教師となり、熊本に赴任する。月給200円。松江の滞在期間は１年７か月であった。

1893（明治26。43才）セツの懐妊を知り帰化を考える。11月17日長男、一雄出生。

1894（明治27。44才）日本に関する最初の著書『知られぬ日本の面影』２巻を出版。10月上旬、第五高等学校を辞して「神戸クロニクル」社に転じる。月給100円。日曜を除く毎日、論説を担当した。

1895（明治28。45才）前年末から過労のため眼に炎症を起こしていたので１月30日退社。眼が快方に向かってからは執筆に専念。『東の国から』出版。７月、日本国籍取得（帰化）を決意する。12月、帝国大学文科大学の外山正一（とやままさかず）学長からハーンに、帝国大学文科大学英文学科の講師として招きたい旨の手紙が送られる。

1896（明治29。46才）帰化手続が完了し「小泉八雲（こいずみやくも）」と改名。「小泉」はセツ夫人の戸籍に入籍したことにより、「八雲」は『古事記』の「八雲立つ出雲八重垣夫婦隠みに八重垣作るその八重垣を」に由来する。『心』を出版。９月11日、帝国大学文科大学英文学科講師として、「英語英文学」を教授することとなり、講義開始。月給400円、のち450円。

1897（明治30。47才）２月15日次男、巖出生。この年から、２夏を除き夏休みに静岡県焼津の山口乙吉宅に滞在する。『仏の畑の落ち穂』出版。

1898（明治31。48才）縮緬本（ちりめんぼん）『猫を描いた少年』出版。『異国情趣と回顧』出版。

1899（明治32。49才）ちりめん本『化け蜘蛛』出版。『霊の日本』出版。12月20日、三男、清出生。

1900（明治33。50才）来日後、一時、跡絶えていたビスランドとの文通を再開。『影』出版。外山正一が逝去。大学での理解者を失い、ハーンは落胆する。

1901（明治34。51才）晩年のハーンの創作活動の協力者、三成重敬（みなりしげゆき）に会う。次男、巖がセツの養母稲垣トミの養子となる。『日本雑記』出版。

1902（明治35。52才）３月19日東京府下豊多摩郡西大久保村に新居を構える。ちりめん本『だんごをなくしたお婆さん』出版。『骨董』出版。ハーンは長男一雄をアメリカで教育したいと考え、また自らもアメリカの大学で講義をする計画を立てていた。結局渡米は実現しなかったが、アメリカでの講義のために用意した原稿がのちに『日本・一つの解釈』となる。

1903（明治36。53才）１月15日、東京帝国大学文科大学学長・井上哲次郎から解雇通知を受け取る。学生達の留任運動が行われたが、３月31日、第３学期を残して退官。ちりめん本『ちんちん小袴』出版。９月10日、長女、寿々子出生。

1904（明治37。54才）３月、早稲田大学文学科

講師[注5]となる。年俸2000円。４月『怪談』出版。９月26日、心臓発作のため急逝。雑司ケ谷に埋葬される。法名「正覺院殿浄華八雲居士」。校正済みではあったが、生前に間に合わなかった『日本・一つの解釈』が10月出版される。

1905（明治38）遺稿集『天の川綺譚その他[注6]』出版。

（田部隆次著『小泉八雲』、銭本健二・小泉凡共著『ラフカディオ・ハーン年譜』恒文社を参考とした）

（注）１～６

⑴　拙稿「明治の唱歌」『へるん』28号、八雲会（松江）、1991．６．27。

⑵　拙稿「ハーンと高峰譲吉」『へるん』29号、1992．６．27。

⑶　Percival Lowell（1855－1916）外交官として来日、日本語を学び1888年 *The Soul of the Far East*（『極東の魂』）を刊行。

⑷　Edward Bramwell Clarke（1874－1934）横浜生まれ。16才のとき、来日直後のハーンから数週間、英作文の個人教授を受ける。大正７年「大阪朝日新聞」に“My Shortlived Connection with Hearn”を発表。

⑸　拙稿「早稲田より三月分入る」『へるん』30号、1993．６．27。

⑹　拙稿「「小ノート」の「天の川綺譚」」前掲書。

Ⅱ　ハーンの東大における英文学講義

ハーンは帝国大学文科大学の外山正一学長に招聘され、明治29年９月の新学期から明治36年３月末まで、６年７か月間ただ一人の英文学科講師として教鞭[注7]をとった。明治29年度の『帝国大学一覧』によると、１年は３学期制で、第１学期は９月11日～12月24日、第２学期は翌年の１月８日～３月31日、第３学期は４月８日～７月８日、学年末試験は６月21日から行われた。講義は週12時間（１時間は45分）Ⓐ５時間は詩人の詩の講読、Ⓑ３時間は英文学史Ⓒ４時間は特殊講義であった。[注8]英文学科以外の学生は選択科目として英語を受講した。Ⓐでは学生の希望によりテニソンの『王女』とミルトンの『失楽園』がテキストとして使用された。英文学科の学生は１、２年生は週７時間（のち９時間となる）３年生は週９時間が必修であった。

ⒷⒸの講義において学生たちは、ハーンの言葉を一言も洩らさじと、ペンにインクをつけながらノートに書きつけた。ハーンは固有名詞や難しい単語は黒板に書き、句読点も指示しながら講義を進めていった。あらかじめ講義用のノートを用意して読みあげるのではなく、掌に乗るほどの小さなメモ帳（以下、講義用メモ）を時々見ながら講義した。これには作家の生年、略歴、書名等の簡単なメモのほか、やや長文の自らの蔵書（現在富山大学附属図書館「ヘルン文庫」収蔵）からの引用文等も書かれている。「講義用メモ」は現在、松江市立図書館と天理大学附属天理図書館に同じ装丁のものが一冊ずつ収蔵されている。

ハーンの東大での学生の受講ノートのうち、現在私が把握しているものは次の７名のノートである。

⑴　茨木清次郎　1899年（明治32）７月卒業
茨木家蔵　［写真２］

⑵　田部　隆次　卒業年同上
染村蔵　［写真３］

⑶　栗原　　基　1901年（明治34）７月卒業
染村蔵の写真より　［写真４］

⑷　小日向定次郎　卒業年同上
染村蔵のコピーより　［写真５］

⑸　藤村　　作　卒業年同上
お茶の水女子大学英文科研究室蔵
［写真６］

⑹　岸　　重次　1903年（明治36）７月卒業
金沢大学附属図書館蔵　［写真７］

⑺　筆記者不詳　天理大学附属天理図書館蔵
［写真８］

［表１］東大講義関係図書（含雑誌）

（1988. 7. 染村絢子作）

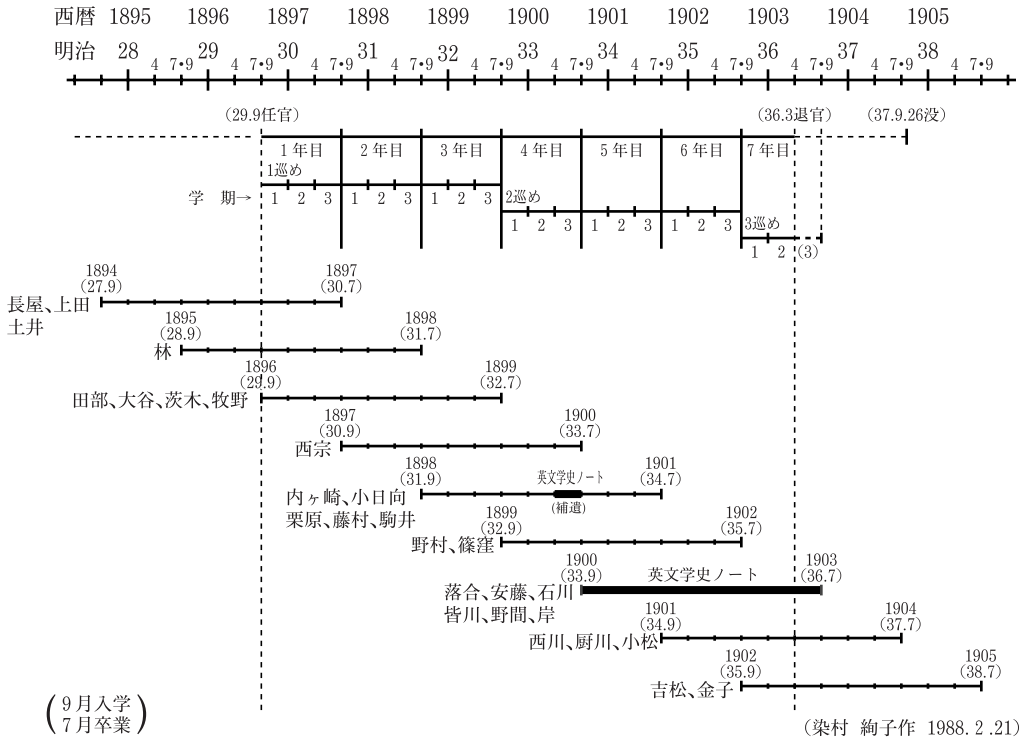
No	出版年	書名	出版社	編集者
1	1906(明39)12. 5	*The Life & Letters of Lafcadio Hearn*, Vol. II	Houghton Mifflin	E. Bisland
2	1910(明43)10. 31	*Lafcadio Hearn in Japan*	Kelly & Walsh	Y. Noguchi
3	1913(大２)４.	*Insects & Greek Poetry*	The Atlantic Monthly	
4	1914(大３)４. 18	『小泉八雲』	早稲田大学出版部	田部　隆次
5	1915(大４)11. 6	*Interpretations of Literature*, 2 Vols	Dodd, Mead	J. Erskine
6	1916(大５)12. 9	*Appreciations of Poetry*	〃	〃
7	1917(大６)11. 24	*Life & Literature*	〃	〃
8	1920(大９)	*Talks to Writers*	〃	〃
9	1920(大９)９. 29	*On Composition* (seperate printing)	The Atlantic Monthly Press	
10	1921(大10)３. 3	*Insect Literature*（『虫の文学』）	北星堂	大谷　繞石
11	1921(大10)８. 29	*On Reading in Relation to Literature*	The Atlantic Monthly Press	
12	1921(大10)10. 8	*Books & Habits*	Dodd, Mead	J. Erskine
13	1922(大11)	*The Writings of Lafcadio Hearn,* Vol. XVI, *Japanese Letters*	Houghton Mifflin	
14	1922(大11)４. 7	*On Literature*（『文学論』）	北星堂	落合貞三郎
15	1922(大11)	*Pre-Raphaelite & Other Poets*	Dodd, Mead	J. Erskine
16	1924(大13)３. 25	*Literary Selections from Lafcadio Hearn*	積善館	栗原　基
17	1925(大14)１. 25	*Life & Literature*	北星堂	田部　隆次
18	1926(大15)２. 1	*Poets & Poems*	北星堂	田部　隆次
19	n. d.	*Lafcadio Hearn on Shelly & Keats*		Hokuseido Press
20	1926(大15)10.	*Insects & Greek Poetry*	William Edwin Pudge	
21	1927(昭２)５. 25	*A History of English Literature,* Vol. I	北星堂	田部　隆次 落合貞三郎
22	n. d.	〃 Supplement	〃	
23	1927(昭２)11. 10	〃 Vol. II	〃	田部　隆次 落合貞三郎
24	1927(昭２)11. 25	*Some English Literary Figures*	〃	田部　隆次
25	1928(昭３)５. 25	*A History of English Literature,* Vol. I	〃	田部　隆次 落合貞三郎
26	1928(昭３)８. 30	*Lectures on Shakespeare*	〃	稲垣　巌
27	1928(昭３)８. 31	*Romance & Reason*	〃	田部　隆次
28	1929(昭４)10. 1	*Lectures on Prosody*	「英文学研究」	片山　正雄
29	1929(昭４)11. 3	*Lectures on Prosody*	北星堂	落合貞三郎
30	1929(昭４)12. 10	*A History of English Literature,* Vol. II	〃	田部　隆次 落合貞三郎
31	1930(昭５)４. 5	Essays on English Poetry	開進堂	宮城運作
32	1930(昭５)	『ロマンス・アンド・リーズン－小説と理論』	新文堂書店	辻繁穂・訳
33	1930(昭５)10. 5	*Victorian Philosophy*	〃	田部　隆次
34	1930(昭５)12. 15	*A History of English Literature* [Entirely Revised I-Volume Edition]	〃	田部　隆次 落合貞三郎
35	1932(昭７)10. 11	Complete Lectures *On Art, Literature & Philosophy*	〃	田部隆次・落合貞三郎・西崎一郎
36	1934(昭９)９. 26	Complete Lectures *A History of English Literature*	〃	田部　隆次 落合貞三郎
37	1934(昭９)９. 26	Complete Lectures *On Poetry*	〃	田部隆次・落合貞三郎・西崎一郎
38	1934(昭９)９. 26	Complete Lectures *On Poets*	〃	〃
39	1941(昭16)３. 9	*Lectures On Tennyson*	〃	岸　重次

藤村作は国文学専攻であったが、２学年間、英語を履修した。その受講ノート、上記⑸［写真６］について藤村は、『八恩記(注９)』の「當時の大学の講義」で「英文学は小泉八雲先生の担任で、講演にはロングフェロー詩集と、テニスン詩集とを抜枠して講ぜられ、英文学講義ではホイットマンからブレーク、ロゼッチその他の英詩人の評論をして下さった。さうしてその間にプロソジーの講義を挿んで下さった。これは私に取っては啓発されたところが多く、又非常に興味を感じたので、その筆記は全部今も保存してゐる....」と述べている。本稿の［写真６］のノートについてである。

ハーンの東大講義の出版経緯を記す。

ハーン没後学生の受講ノートをもとに“Naked Poetry”が *The Life and Letters of Lafcadio Hearn*, 1906で初めて発表された。p.11の［表１］の東大講義関係図書（含雑誌）のNo１である。田部隆次はNo２の *Lafcadio Hearn in Japan* が出版された1910年（明治43)、ハーンの親友でハーンの遺著管理者であった横浜在住の米国海軍勤務M.マクドナルド(注10)［写真９］に、ハーンの講義筆記を出版してはどうかと提言した。マクドナルドは直ちに賛成し、これにより田部の発議で教え子たちは受講ノートを持ち寄った。田部隆次、大谷正信、茨木清次郎、栗原基、小日向定次郎、内ケ崎作三郎、石川林四郎、落合貞三郎、岸重次の諸氏であった。マクドナルドは日本滞在中の宿としていた横浜グランドホテルの部屋で、自らまたはタイピストを雇って私蔵の資料によると1910年から1914年までかけて、同一のタイプ原稿を３部作成した。マクドナルドはアメリカに一時帰国した際、この３部のタイプ原稿のうちの１部を持参して、コロンビア大学のJ.アースキン教授に託した。教授は主に前記Ⓒの講義から、またⒷからも若干選んで３種

［表２］ハーン東大講義の年譜



４冊を１年ごとに Dodd, Mead から出版した。［表１］の No５，６，７である。引き続きこれら４冊を底本として抜粋本 No８，12，15の３冊を出版した。

アースキン教授は、多くの講義項目の中から自らの判断で興味ある項目のみを選んでアメリカで出版した。学生の受講ノートとこれ等アースキン編集の出版本とを比較すると、アースキン教授が省略編集した頁が多い。

マクドナルドが作成した３部のタイプ原稿のうち、１部は前述の如くアースキンに、１部はマクドナルド自身が所有していたが、1923年（大正12）関東大震災で焼失した。残る１部が、［写真10］の箱の中にぎっしり入れられていた。この箱はマクドナルドが、タイプ原稿を収めるために作ったものである。日本では、この箱の中のタイプ原稿をもとに[写真11]、アースキンが採用しなかった項目の中から、主に北星堂が、田部隆次を中心に教え子達の編集で出版した。版権所有者マクドナルドは、田部への献辞を自らの名刺に記して、アースキン編集の *Appreciations of Poetry*, 1916 を贈っている。この名刺には Pay Director U.S. Navy (Retired) と印刷されている[写真12]。グランドホテル社長就任の年である。

北星堂が出版した p.11［表１］No21の *A History of English Literature*（『英文学史』）の出版経緯については、若干の説明を必要とする。p.12に掲げる［表２］ハーン東大講義の年譜の太線部分が『英文学史』で採用された学生のノートである。

ハーンの英文学史の講義は、３年間続けて受講すればどの年度に入学しても一巡するものである。北星堂出版の『英文学史』は、1900年（明治33）９月に入学した５，６，７年目の学生（［表２］の石川林四郎、落合貞三郎、岸重次、安藤勝一郎のクラス）のノートをタイプした原稿に基づいていた。第３巡目に入ったこのクラスは第３学年（７年目）の途中でハーンが退官し、彼等は第３学期の講義を受けることができなかった。しかしこのことに気づかず、北星堂は全２巻のうちの第１巻を出版してしまった。この欠落部分は「補遺」(Supplement)として、２年先輩の学生（太線、栗原基、小日向定次郎のクラス）の４年目の第３学期のノートで補われた。この欠落部分を指摘したのは、『英語青年』（昭和２.10.１）での福原麟太郎と、『英文学研究』（昭和２.10.10）でＺの記名の２名であった。（のち、この「補遺」は、収録されるべき本文中に入れられた）なお後述する岸重次は『英文学史』の目次に、ハーンから、いつ、どの項目を受講したかを記入している[写真37]。

（注）７～10

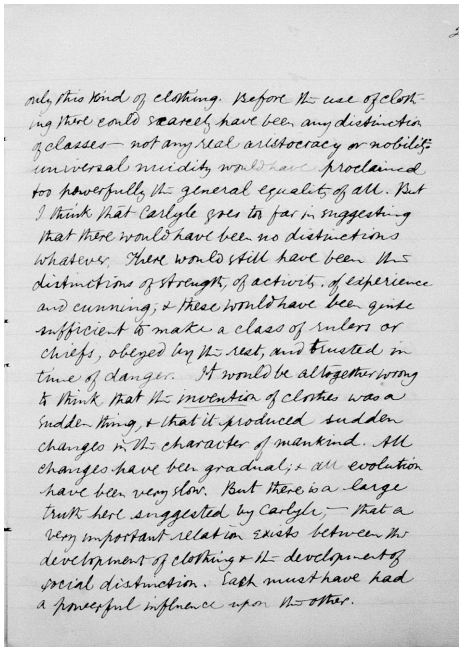
⑺　拙稿「東大講義」『へるん』26号、1989．６．27。

⑻　小林清一「ラフカディオ・ハーンの講義」MIMESIS, 1973, ５月号。

⑼　藤村作「當時の大学の講義」『八恩記』角川書店、昭和30．11．20，p.116。

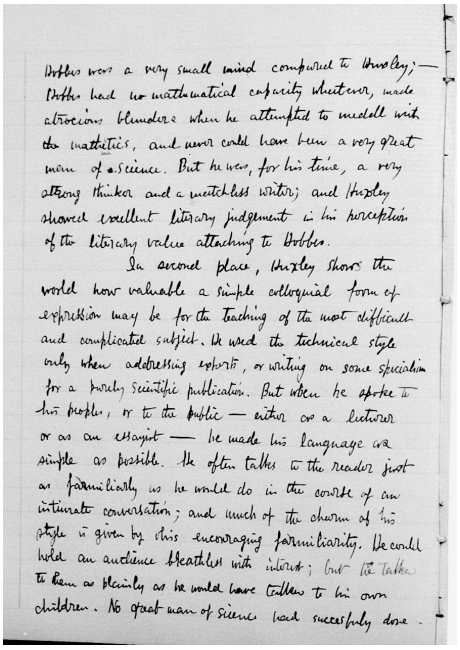
⑽　Mitchell McDonald（1853－1923）The Japan Directoryによると1916年、横浜グランドホテル社長であった。1923年関東大震災の際に、グランドホテルで亡くなった。

［ハーンの東大における英文学講義］



only this kind of clothing. Before the use of clothing there could scarcely have been any distinction of classes — not any real aristocracy or nobility: universal nudity would have proclaimed too powerfully the general equality of all. But I think that Carlyle goes too far in suggesting that there would have been no distinctions whatever. There would still have been the distinctions of strength, of activity, of experience and cunning; & these would have been quite sufficient to make a class of rulers or chiefs, obeyed by the rest, and trusted in time of danger. It would be altogether wrong to think that the invention of clothes was a sudden thing, & that it produced sudden changes in the character of mankind. All changes have been gradual; & all evolution have been very slow. But there is a large truth here suggested by Carlyle — that a very important relation exists between the development of clothing & the development of social distinction. Each must have had a powerful influence upon the other.

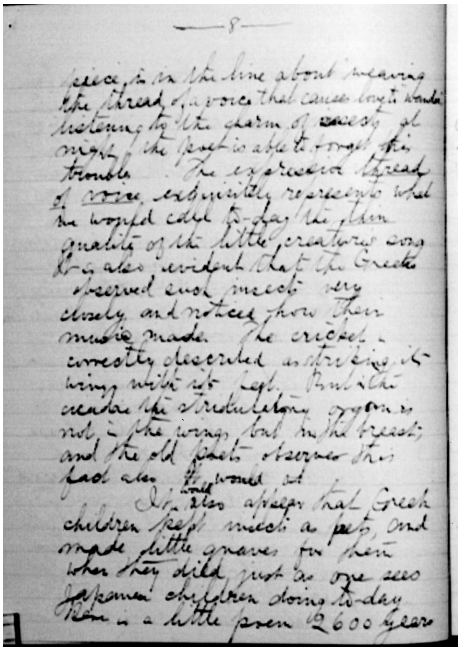
［写真 2］茨木清次郎・受講ノート



Dobbs was a very small mind compared to Huxley; — Dobbs had no mathematical capacity whatever, made atrocious blunders when he attempted to meddle with the mathematics, and never could have been a very great man of science. But he was, for his time, a very strong thinker and a matchless writer; and Huxley showed excellent literary judgement in his perception of the literary value attaching to Dobbs.

In second place, Huxley shows the world how valuable a simple colloquial form of expression may be for the teaching of the most difficult and complicated subject. He used the technical style only when addressing experts, or writing on some speciality for a purely scientific publication. But when he spoke to his people, or to the public — either as a lecturer or as an essayist — he made his language as simple as possible. He often talks to the reader just as familiarly as he would do in the course of an intimate conversation; and much of the charm of his style is given by this encouraging familiarity. He could hold an audience breathless with interest; but he talks to them as plainly as he would have talked to his own children. No great man of science had successfully done

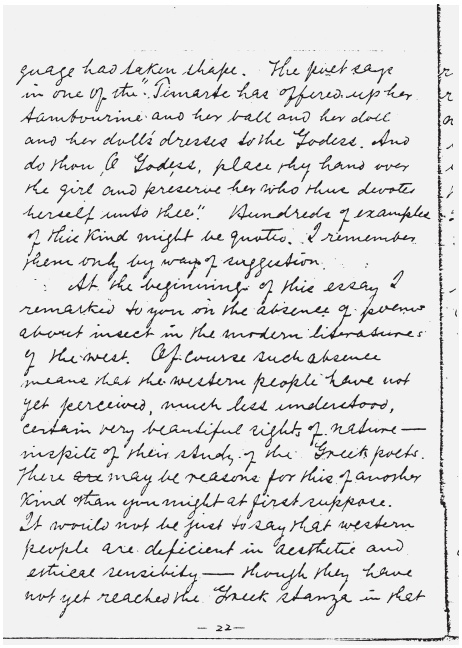
［写真 3］田部隆次・受講ノート



— 8 —

piece is in the line about weaving the thread of life, — that cause by it would be broken by the charm of music, of song, the poet is able to avoid this trouble. The expression "thread of voice" exquisitely represents what he would call the plain quality of the little creatures voice. It is also evident that the Greeks observed such insects very closely and noticed how their music made. The cricket correctly described as striking it wing with its leg. But the cicada's stridulatory organs are not in the wings, but in the breast; and the old poets observers this had also noticed it. It also appears that Greek children kept insects as pets, and made little graves for them when they died, just as we see Japanese children doing to-day. Poem is a little poem 2600 years

［写真 4］栗原基・受講ノート



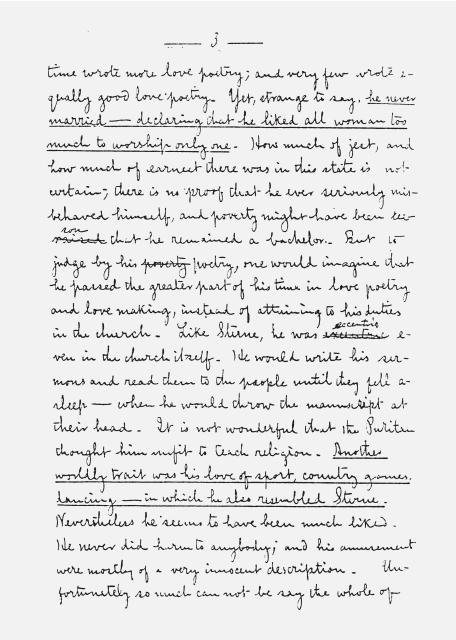
guage has taken shape. The poet says in one of the "Pimarde has offered up her tambourine and her ball and her doll and her dolls dresses to the Goddess. And do thou, O Goddess, place thy hand over the girl and preserve her who thus devotes herself unto thee." Hundreds of examples of this kind might be quoted. I remember them only by way of suggestion.

At the beginning of this essay I remarked to you on the absence of poems about insect in the modern literatures of the west. Of course such absence means that the western people have not yet perceived, much less understood, certain very beautiful sights of nature — in spite of their study of the Greek poets. There may be reasons for this of another kind than you might at first suppose. It would not be just to say that western people are deficient in aesthetic and ethical sensibility — though they have not yet reached the Greek stanza in that

— 22 —

［写真 5］小日向定次郎・受講ノート

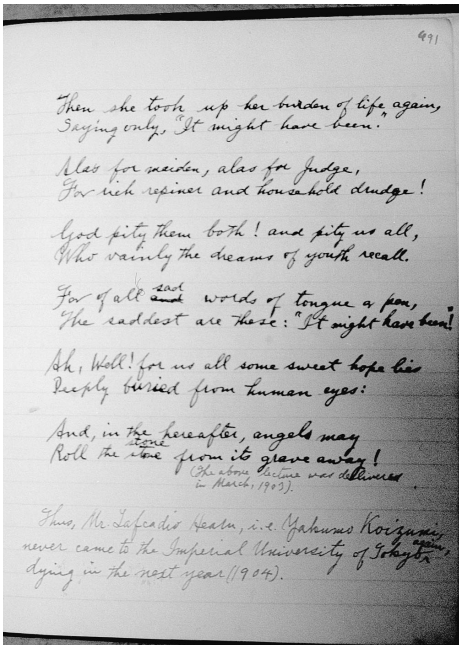
［ハーンの東大における英文学講義］



—— 3 ——

time wrote more love poetry; and very few wrote equally good love poetry. Yet, strange to say, he never married — declaring that he liked all woman too much to worship only one. How much of jest, and how much of earnest there was in this state is not certain; there is no proof that he ever seriously misbehaved himself, and poverty might have been the reason that he remained a bachelor. But to judge by his ~~poverty~~ poetry, one would imagine that he passed the greater part of his time in love poetry and love making, instead of attending to his duties in the church. Like Sterne, he was ~~secular~~ secular even in the church itself. He would write his sermons and read them to the people until they fell asleep — when he would throw the manuscript at their head. It is not wonderful that the Puritan thought him unfit to teach religion. Another worldly trait was his love of sport, country games, dancing — in which he also resembled Sterne. Nevertheless he seems to have been much liked. He never did harm to anybody; and his amusement were mostly of a very innocent description. Unfortunately so much can not be say the whole of

［写真６］藤村作・受講ノート



491

Then she took up her burden of life again,
Saying only, "It might have been."

Alas for maiden, alas for judge,
For lich repiner and household drudge!

God pity them both! and pity us all,
Who vainly the dreams of youth recall.

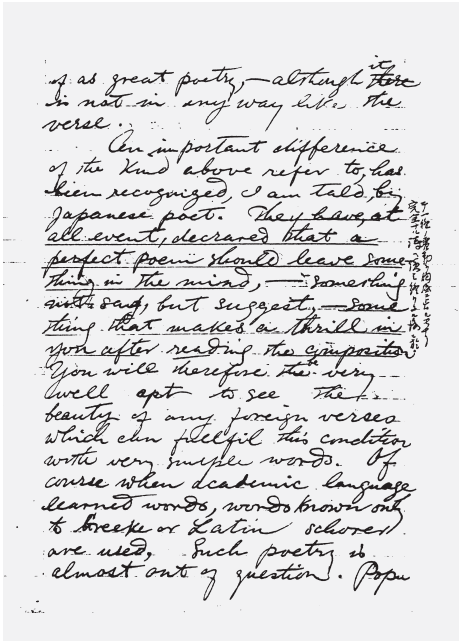
For of all ~~sad~~ sad words of tongue a pen,
The saddest are these: "It might have been!"

Ah, Well! for us all some sweet hope lies
Deeply buried from human eyes:

And, in the hereafter, angels may
Roll the stone from its grave away!
(The above stone was delivered in March, 1903).

Thus, Mr Lafcadio Hearn, i.e. Yakumo Koizumi, never came to the Imperial University of Tokyo, dying in the next year (1904).

［写真７］岸重次・受講ノート

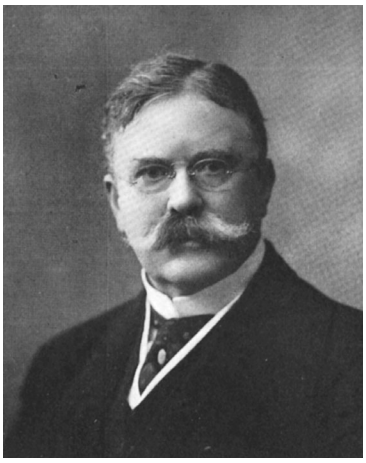


of as great poetry, — although it ~~there~~ is not in any way like the verse.

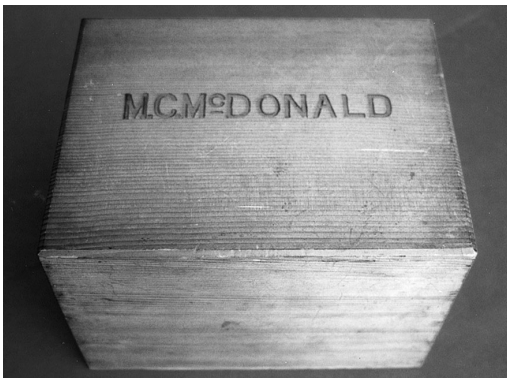
An important difference of the kind above refer to, has been recognized, I am told, by Japanese poet. They have at all event, declared that a perfect poem should leave something in the mind, — something ~~with~~ sad, but suggest, — something that makes a thrill in you after reading the composition. You will therefore the very well apt to see the beauty of any foreign verses which can fulfil this condition with very simple words. Of course when academic language learned words, words known only to Greek or Latin scholars are used, such poetry is almost out of question. Popu

［写真８］筆記者不詳・受講ノート

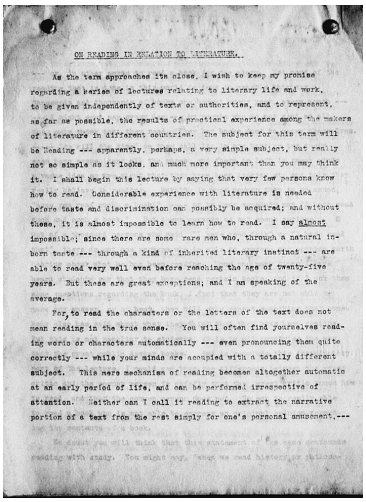
［ハーンの東大における英文学講義］



［写真９］M.マクドナルド『文学アルバム小泉八雲』恒文社より



［写真10］タイプ原稿収納箱　染村蔵

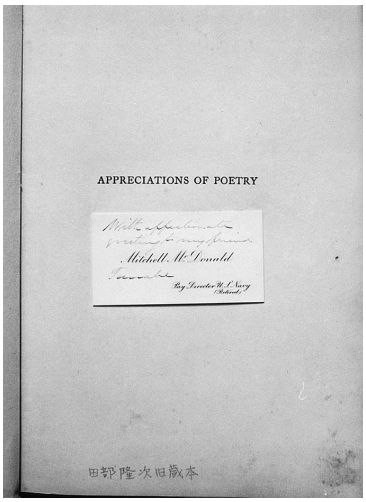


ON READING IN RELATION TO LITERATURE.

As the term approaches its close, I wish to keep my promise regarding a series of lectures relating to literary life and work, to be given independently of texts or authorities, and to represent, as far as possible, the results of practical experience among the makers of literature in different countries. The subject for this term will be Reading --- apparently, perhaps, a very simple subject, but really not so simple as it looks, and much more important than you may think it. I shall begin this lecture by saying that very few persons know how to read. Considerable experience with literature is needed before taste and discrimination can possibly be acquired; and without these, it is almost impossible to learn how to read. I say almost impossible; since there are some rare men who, through a natural inborn taste --- through a kind of inherited literary instinct --- are able to read very well even before reaching the age of twenty-five years. But these are great exceptions; and I am speaking of the average.

For, to read the characters or the letters of the text does not mean reading in the true sense. You will often find yourselves reading words or characters automatically --- even pronouncing them quite correctly --- while your minds are occupied with a totally different subject. This mere mechanism of reading becomes altogether automatic at an early period of life, and can be performed irrespective of attention. Neither can I call it reading to extract the narrative portion of a text from the rest simply for one's personal amusement.---

［写真11］"On Reading"の原稿　染村蔵



［写真12］*Appreciatiors of Poetry*のタイトル頁　染村蔵

Ⅲ　第四高等学校教授となった教え子たち

前章では、ハーンが行った東大での講義について述べた。本章では、東大卒業後、金沢の旧制第四高等学校に赴任した８名（７名は英文学科、１名は漢学科）のハーンの教え子について述べる。人数が多いことも特筆すべきことであるが、教え子たちはハーン没後、ハーンの伝記や東大講義録、『小泉八雲全集』、書簡、作品翻訳等の出版に尽力した。以下８名の教授について記す。

１．茨木清次郎

茨木清次郎に関する調査研究は、これまで金沢でも英文学界でも行われた事がなかった。資料の集収が困難のためであったが、ご遺族のご好意で多くの資料を拝借する事ができ、1997年10月『北陸英学史研究』第８輯に、「茨木清次郎と英学」のタイトルで拙稿を発表した。経歴も茨木家所蔵の資料によって記した。

私は長く拝借していた貴重な資料を公開展示したい、との思いから、昨年春、石川近代文学館において、また続いて秋には、金沢大学資料館において特別展を開催し、資料を展示した。資料はそれぞれ貴重であるが、来館者が興味をもったのは Koizumi Yakumo の署名のある東大の卒業証書と、きれいに書かれた茨木の受講ノートであった。

帝大入学時の英文学科同期生には、茨木清次郎ほか、大谷正信、田部隆次、浅野和三郎、戸川明三等が、先輩には長屋順耳、上田敏、土井林吉、林並木等、その後入学の後輩には内ヶ崎作三郎、小日向定次郎、栗原基、岸重次、石川林四郎、落合貞三郎、西川巌等がいた。後年、上記の学生の中から四高教授となったのは、茨木、田部、大谷、長屋、林、岸、西川と漢学科の駒井徳太郎の８名である。

明治32年７月、東大を卒業した茨木は、同年８月21日、四高の講師となる。同年９月11日、始業式が行われ、他の新任教師とともに生徒に紹介された。このときの場面を田部隆次が、『西田幾多郎の手紙(注11)』の冒頭で「今より約半世紀の昔、明治32年９月11日金澤第四高等学校の雨天体操場で新学年の始業式が行はれた。校長北條時敬先生によって五人の新教師が全校生徒に紹介された。西田幾多郎君、戸田海市君、中目覚君、茨木清次郎君及び私の五人であった」と述べている。

この新任教師５人のうち、西田、茨木、田部の３名は、翌明治33年に学年の有志と集い、西田が命名した「三々塾」に加わり、毎月１回土曜の晩に塾生と教師とが集まって茶話会を開いた。

茨木は、四高に赴任後、1902（明治35）２月25日英国へ２年間留学する。その間の日記帳２冊がある。

帰国後の日記帳には殆ど記入がない。９月26日ハーンが亡くなったが、記入はない。但し、12月２日「東京府下豊多摩郡西大久保256、小泉節子及令息一雄氏より正覺院殿浄華八雲居士ノ香典返シトシテ布沙一個送与アリ、鷺ハ故人ノ家紋ナリト云」。３日には「小泉氏へ、林、田部、自分ノ名ニテ礼状差出ス」と記されている。新学期が始まった直後であり、遠方からハーンの葬儀に参列する事はできなかったが、当時、四高の教授であったハーンの３人の教え子、林並木、田部隆次、茨木清次郎は香典を送っている。家紋入り布沙が香典返しに使われたことは、茨木日記によって分かったことであるが、現在、小泉家にも茨木家にも残されていない。

茨木清次郎　略年譜

1876（明治９）８　金沢市水溜町８番地に生まれる。茨木操、雅の次男。

1882（明治15）３　淳正小学校（金沢市里見町）入学。

1884（明治17）11　初等科卒業。

1885（明治18）　淳正小学校を新堅町男児小学校と校名変更。

1886（明治19）10　小学中等科第５年期修了。

1887（明治20）７　高等科金沢小学校へ進学。12月、高等小学科第２年修了。

1888（明治21）９　第四高等中学校豫科補充科第１年入学。

1894（明治27）７　豫科第３年修了、[写真13] 第四高等学校大学豫科文科第２学年入学。

1896（明治29）７　同校卒業。[写真14] ９月帝国大学文科大学英文学科入学。英文学科のただ一人の講師として、小泉八雲（Lafcadio Hearn）が神戸から赴任してくる。

1897（明治30）７　次学年の特待生に選定される。

1898（明治31）７　次学年の特待生に選定される。

1899（明治32）７　東京帝国大学文科大学英文学科卒業。(注12)[写真15] 優等生として銀時計恩賜。８月、第四高等学校講師。

1900（明治33）９　第四高等学校教授。[写真16]

1901（明治34）９　英語学研究の為、満２カ年間、英国へ留学。留学直前、同僚と撮影した写真がある。足袋をはいたままの教授もいる。[写真17]

1902（明治35）２　外国語教授の方法取調のため留学。

1903（明治36）　英国留学中の２年間の日記がある。[写真18] 留学中、漱石と重なる時期があり、先に帰国した漱石の住所が住所録にある。[写真19] 留学中、イギリスの写真館で撮影した写真がある。[写真20]

1904（明治37）６　英国から帰国。７月文部省の初めての地方講習会が金沢の四高で開かれ、茨木が２日間にわたり講演。この時の講演原稿が残されている。[写真21]

1904（明治37）９．26　小泉八雲逝去。

1905（明治38）５　明治38年開設の師範学校、中学校、高等女学校の教員夏期講習会講師となる。（明治39、40、41年も同様）９月、前田家の家老、本多政以男爵の長女と結婚。[写真22]

1908（明治41）７　四高退官。文部省視学官。

1913（大正２）６　文部省督学官。

1917（大正６）　東京音楽学校長。

1918（大正７）　東京外国語学校長。

1919（大正８）　松本高等学校長。

1921（大正10）11　東京女子高等師範学校長。[写真24]

1927（昭和２）２　浦和高等学校長。

1935（昭和10）４　同校退官。同校名誉教授。

1937（昭和12）　竹田宮附別当。[写真23]

1943（昭和18）３　叙勲一等授瑞宝章。

1946（昭和21）４　退官。引続き竹田宮附。10日依願竹田宮附を解く。

1955（昭和30）３．15　茨木清次郎逝去。行年80才。法名「松齢院殿研学悟道居士」。墓は先祖代々の金沢・野田山墓地にある。

２．田部隆次　略年譜

1875（明治８）10．20　富山県上新川郡山室町字東長江で、父南日喜平、母みんの５男７女の次男に生まれる。(注13)

1893（明治26）　富山県尋常中学校卒業。９月、東京専門学校文学科（現早稲田大学）に入学。３か年在学。田部の履歴書によると、学年試験では絶えず首席を占め、28年の試験にヘフディング心理学一冊を受賞し、28年９月から29年６月までチャモレーの私宅で隔晩英語英文学を学んだ。私蔵の田部が在学中受講筆記したノート、大西祝講の「西洋哲学史」「論理学・心理学」、斎藤木講「支那文学について」、斎藤附具講「西洋史」等はすべて毛筆で書かれている。

1896（明治29）６　東京専門学校卒業、９月帝国大学文科大学英文学科撰科（田部が東大を卒業し、四高赴任に際して提出した履歴書には「選科」の「選」を「撰」と記しているが、その後の著述等においては「選」としている）に入学した。３年間ハーンの講義を受講、第１年第２年の独逸語を除き、当時の本科生と同じく学科を履修し、試験に合格した。31年から英文学科全体で、ハー

ンの懸賞論文を課せられ、合格してホウソン全集８冊を、32年にもラスキン全集13冊を受ける。ハーンが行った東大講義の受講ノートを私蔵しているが、細かい字で書かれ、装丁されている。

1899（明治32）７　東京帝国大学文科大学英文学科を卒業。卒業に際して同級生13名で記念写真[写真26]を撮る。この13人の中の牧野茅（ちがや）と田部隆次をモデルに、小説「おぼろ影[注14]」を同期の浅野和三郎（憑虚（ひょうきょ））が書いた。モデルの特定に至った経緯は、私蔵の田部の蔵書目録２冊にそれぞれ「小説おぼろ影は隆次をモデルにしたもの」「小説『おぼろ影』浅野憑虚著中、玉場と云うのは田部隆次のこと」と書かれているからである。松本健一『神の罠－浅野和三郎、近代知性の悲劇』（新潮社1989）で「おぼろ影」を一部省略で引用しているが、モデルの特定には至っていない。９月５日第四高等学校講師。茨木清次郎、西田幾多郎、田部隆次、戸田海市、中目覺の５人が同時に就任した。

1900（明治33）　学生の有志が集まってつくった塾を、西田が「三々塾」と命名。[写真27] 西田とともに田部はここで学生を指導監督した。養子先の婚約者、せん子は富山出身である。

1902（明治35）　４月結婚。７月18日教授となる。

1903（明治36）　７月上京。「当時高等学校の入学は綜合試験によって行われ、試験委員は各地方から上京して一堂に集まって採点する事になっており、私共は一高で何千枚かの答案調べをした。このとき同じテーブルで、一高教師であった夏目漱石が答案を読んでいた。未だ『猫』を発表する前であった。答案調べが終った翌日、大学で同級であった戸澤正保君と一緒に、先輩夏目漱石先生に敬意を表す為に、駒込のお宅を訪問した。森川町の宿へ帰って昼食後一休みしてゐるところへ、夏目先生が訪ねて来られた。余りに早い答礼ぶりと几帳面さに驚いた。先生は夏羽織と夏袴をつけておられた。」[注15]同日田部は、この年の３月に東大を辞めたハーンを見舞に人力車で出掛けた。

1904（明治37）　水溜町14番地に移転。９月26日、ハーン逝去。

1906（明治39）　長町27番地に移転。

1907（明治40）　長町２番丁28番地に移転。兄南日恒太郎[注16]から「山口醸酒（みき）先生の代りに学習院へくる気はないか」との神田乃武（かんだないぶ）の伝言を記した手紙を受けとる。田部は承諾の旨を伝えた。「金沢では私の終生の友を幾人か得た。長屋順耳、林並木、茨木清次郎、森内政昌、藤井乙男、西田幾多郎、正力松太郎、品川主計、河合良成の諸君である。９月４日学習院女子部教授となった。東京の西大久保の兄南日の家（東京市外西大久保439）に落着いて、それから234番地の貸家に落着いた。小泉家が近かった（西大久保265）ので転任の挨拶に出かけた。小泉夫人（小泉セツ）に会ったのはこれが初めてであった。奥さんは間もなく外国の本屋への手紙を書いてもらいたいといって来訪された。これが小泉さんとの交渉の始まりであった。」

1908（明治41）　「転任して間もなくしきりに一高にこないかとすゝめた人がいたが断った。転任して間もない事であるからという理由と、今一つは、英作文の先生と云うことであったので、余り自信がなかったからであった。恐らく新渡戸稲造（にとべいなぞう）校長は、私が小泉先生の懸賞論文に度々賞を得たことを聞いて、余程英文を達者に書くとでも誤解したのであろうか」。図書課長を大正10年まで勤める。

1914（大正３）　ハーンの伝記は、ハーン没後すぐ計画された。しかし、伝記を書くことになっていたハーンの東大での教え子、内ケ崎作三郎が英国留学することになったので、田部が代って引受け、この年『小泉八

雲』（早稲田出版）が出版された。西田幾多郎の序文がある。

1919（大正８）　９月、田部はこの頃セツ夫人からハーン旧蔵本売却について一任され、翌年の大正９年３月にかけて、手紙で西田幾多郎に相談する(注17)。西田は「外国に売却されないよう、我国のため」と自ら国内での売却先を探す。

1921（大正10）４．２～1922（大正11）３．22　欧米各国へ出張。関東地方で1921年12月８日夜９時半強震があった。

1922年（大正11）　１月１日夜、隣家で火災がおき、田部家は焼けなかったが家財などに被害をうけた。後に小泉家が、早くハーンの旧蔵書を地震にも火災にも強い安全な場所に売却したいと考えたのは、一般に言われている関東大震災を指すのではなく、小泉家の近くでおきたこの火災と、前年末の28年ぶりという強い地震のためであったと考えられる。３月28日田部帰国。兄南日恒太郎は、前年９月学習院を辞して、故郷富山に帰り自由な研究生活に入っていた。４月、弟、田部重治が法政大学教授となる。この頃弟、重治(注18)は、兄、隆次からハーン旧蔵書売却の話を聞き、是非法政大学に譲って欲しいと話が進む。９月１日関東大震災が起きるが、小泉家に被害はなかった。この頃富山では、馬場はる子個人の寄附により旧制富山高等学校が設立されることとなる。初代校長に南日恒太郎が推された。南日はハーンの旧蔵書を是非、富山高校へ売って欲しい、と弟隆次に依頼した。南日が「富山は田舎なので何かよいアトラクションがなければ良い教師が来てくれない。それから、これは自分の独断で決めるのだが、結局馬場はる子さんに金を出して貰えなかったら自分で出す」とまで断言したので隆次はひどく動かされ「こういうものは、東京よりも田舎の方が安全であろう。また色々な文化施設は、東京に許り集中しないで、日本全国に分散した方が良いと考えていたので、富山高校へ譲ることにした。そこで小泉夫人を説得し法政大学への売却は断って富山高校の方へ譲ることにした」。ハーン旧蔵書は『日本・一つの解釈』の原稿1,200枚をつけて、法政大学より5000円高い15,000円で売却された。現在は富山大学附属図書館「ヘルン文庫」に収蔵されている。教務課長、学生監になる。

1926（昭和１）　新設の京都府立女子専門学校の校長になることを勧める人があったが断る。この頃田部は第一書房から『小泉八雲全集』、また注釈づきの英文教科書、約10種を「北星堂」「研究社」から出版した。

1928（昭和３）　７月20日、兄南日恒太郎は、富山高校近くの岩瀬海岸で遊泳中に急逝。松浦学習院長に、兄のあと富山高校長へ行くように尽力するから行ってはどうか、と言われたが辞退した。日米文化学会主事(注19)となる。事務所は三菱社内にあった。

1929（昭和４）　御即位の御大典に宮内職員総代として参列して間もなく、松浦学習院長に辞職を申出た。この頃、津田塾へ２時間出講しており、武蔵高校からも専任教師の依頼をされる。

1930（昭和５）　４日武蔵高校専任講師。

1933（昭和８）　武蔵高校専任教授。

1935（昭和10）８　田部夫妻はP. D. パーキンズ（後述するハーンの書誌学者）一家と小泉家を訪れる。[写真28,29]

1941（昭和16）　眼の弱い田部にとって津田塾の答案直し、日米文化学会の事務所の余り明るくない部屋で細字の書物を調べることは負担であったので、双方とも退職。日米文化学会は自然消滅。この頃から近視、白内障、網膜剥離が加わって読書執筆など人手に頼るようになる。

1945（昭和20）４　群馬県に疎開。５月25日、東京の家はB29の空襲により書庫を除いて焼失。

1946（昭和21）４　疎開先から東京へ引さ揚げる。ハーン関係の本を７社から10冊出版。

1950（昭和25）６　ハーン生誕100年祭が各地で行われる。田部の眼は一層悪化したが、付添いに伴われて富山大学の記念講演会で「小泉八雲と日本」を講演。富山県高岡の２高校とNHK、早稲田でも講演をした。

1957（昭和32）12．10　田部隆次逝去。

３．大谷正信　略年譜

1875（明治８）３．22　島根県松江市末次本町13番地に善之助の長男として生まれる。

1887（明治20）９　島根県尋常中学校に入学。

1890（明治23）９　ハーンが島根県尋常中学校に英語教師として赴任。ハーンが松江を離れるまでの１年３か月間、ハーンに英語を学ぶ。大谷は、ハーンの作品『知られぬ日本の面影』の「英語教師の日記から」及び「さようなら」に登場する。

1892（明治25）７　島根県尋常中学校卒業。９月、京都の第三高等学校入学。高浜虚子、河東碧梧桐と同級となり、俳句への眼を開かれる。学制改革のため、仙台の第二高等学校へ転校。虚子、碧梧桐と同級となる。

1895（明治28）７　仙台から郷里、松江に帰省する途中、神戸のハーン宅を訪れる。この時大谷は、ハーンの書斎にあった書物の題名を控えており、ハーン没後、雑誌『帝国文学(注20)』に発表した。

1896（明治29）６　第二高等学校を卒業し、９月、帝国大学文科大学英文学科に入学し、再び、ハーンの教えを受けることとなる。学資の目処がつかないことをハーンに相談した結果、ハーンは、創作活動のアシスタントとして、毎月日本の資料を英訳して提出することを条件に、学資相当分を払うことを約束した。大谷はこれにより学資を得て、大学を卒業することができた。二高を中退して子規庵に寄寓していた河東碧梧桐に、正岡子規を紹介される。

1899（明治32）７　東京帝国大学を卒業。卒業後、第四高等学校の教授に就任するまでは、多くの中学校で教鞭をとったが、本稿では省略する。

1900（明治33）５　ハーンから「蜻蛉（とんぼ）」の課題を与えられるが、資料集収に困難を来し、子規に未刊の「俳句分類」の原稿を借りる（「俳句分類」は子規没後出版された）。明治34年出版の『日本雑記』の「蜻蛉」に、この時の俳句が使われた。

1901（明治34）　この頃までハーンへ資料の英訳を提供していたようであるが、以後、両者の関係は跡絶える。大谷が、自分はハーンのアシスタントであると公言したためであった。

1904（明治37）９．26　ハーン逝去。ハーン逝去後２か月の11月発行の『明星』及び『帝国文学』で、ハーンに関して知るところを記す。特に『明星(注21)』では、ハーンのアシスタントで、いつ、どのような課題を与えられそれがどの作品の資料となったかを詳細に発表した。

1908（明治41）８．31　第四高等学校教授。金沢市桜畠９番丁19。

1909（明治42）２　金沢市川除町に移転。９月20日、英語学研究のため満２か年英国へ留学。

1910（明治43）　１月31日付の茨木清次郎の手紙に対する２月21日付返書が茨木家にある。[写真31]　文中、大谷が英国留学に際し、当時、文部省視学官であった茨木清次郎の尽力があったことに対するお礼が述べられている。また、大谷の英国での生活が詳しく報告されている。

1912（明治45）２．22　帰国。４月８日、金沢市本多町６番丁37。四高での大谷の教師像は『北の都に秋たけて第四高等学校史(注22)』に「…「繞石」と号して夏目漱石の俳友であり、小泉八雲の愛弟子。半白の髪を真ん中から分け、当時の四高教授中のベストド

レッサーといわれた。始業のベルと同時に教室に飛び込み、横向きのままおじぎし終るや次々と学生を指名、学生がつかえるといかにも嬉しそうにエンマ帳に印をつけ、終業のベルが鳴ると脱兎の如く飛び出していったもの。講義は厳格を極め、質問をすると落第をするという伝説があり悪童連に畏怖された。一見人間嫌いの風であるが、その実淋しがり屋で人なつっこい人。」と書かれている。

1912（大正１）　金沢市池田町３番丁21に移転。(注23)

1913（大正２）　〃　茨木町45に移転。

1914（大正３）　〃　川岸町８に移転。

1919（大正８）　大谷の出身地、松江には、ハーンゆかりの地が多くあるが、中でも、ハーンが住んだ松江城の濠端にある武家屋敷は特に有名である。この屋敷の持主は、ハーンの教え子で、大谷の２年後輩である根岸磐井(注24)であった。屋敷は「小泉八雲旧居」として一般公開されたが、外国からの見物客も多く、英文案内が必要となり、根岸は自ら書いた日本文の案内文を英訳するよう大谷に依頼した。大谷は英訳文を英国人に見せて正確を期している。私蔵の英国人から送られてきた英文と、大谷の英訳案内文とを比較すると、大谷は英国人の文章は参考にとどめている。この英訳文は、May 1919（大正８）と印刷されているので、金沢市川岸町時代のことである。

1920（大正９）　金沢市池田町３番丁２番地に移転。[写真32]

1922（大正11）８．３　金沢市で４時間に115ミリという金沢気象台開設以来の集中豪雨で犀川が氾濫し、上流のほとんどの橋が流失して犀川大橋にひっかかり、水をせき止めてダム状になって低地の片町方面に流出した。池田町の大谷の家はアッという間に冠水、蔵書を殆ど失った。家は平屋であったため、屋根裏部屋へ逃れたが、書架の書物は下三段全部浸水した。床上３尺５寸、畳の上には２、３分の泥が積った。(注25) 大谷の東大でのハーン受講ノートが残されていないのは、このため(注26)と思われる。

犀川氾濫の報道写真は種々、残されているが、私蔵の絵葉書を金沢大学資料館の大谷のコーナーに展示したところ、来館者の方から「壊れた犀川大橋の向こうに見える建物は、室生犀星が住んでいた雨宝院と思う、珍しい」とのご指摘を頂いた。日付入りの絵葉書であることも珍しい。[写真33] 金沢市長町３番丁４へ移転。

1923（大正12）３　金沢市水溜町12番へ移転。

1924（大正13）１　四高教授を辞して広島高等学校教授となる。第一書房『小泉八雲全集』(注27) 全18巻の約３分の１を翻訳し、髪が真白になった。

1932（昭和７）　松江では、かねてから、前記、根岸磐井[写真34]が中心となって、小泉八雲旧居の隣地に小泉八雲記念館建設の計画をたてていたが進展しなかった。しかしその後、東大教授市河三喜の協力を得て実現へとこぎつける。市河三喜を根岸磐井に紹介したのは大谷であった。広島の大谷のもとへ立ち寄っていた市河夫妻が松江にむかうにあたり、「松江に行かれるのでよろしく」、と松江の根岸に10月22日付の葉書を出している（根岸家蔵）。市河夫妻が根岸邸（小泉八雲旧居）を10月26日に訪れて、蓮池の前で撮影した写真[写真35]がある。

1933（昭和８）３月14日根岸磐井逝去。11月17日大谷正信逝去。11月29日「小泉八雲記念館」は山口蚊象(注28)設計によって施工したが、完成を心待ちにしていた大谷と根岸は、二人とも記念館竣工を見ることなく亡くなった。

４．岸　重次　略年譜

1878（明治11）９．24　金沢市主馬町４番地で生まれる。秀実の次男。

1900（明治33）７．11　第四高等学校第一部文

科卒業。９月、東京帝国大学文科大学英文学科入学。ハーンが退官する1903年（明治36）３月まで、２年７か月間英文学の講義を受ける。この時のハーン講義の受講ノート８冊が金沢大学附属図書館「岸文庫」に収蔵されている。岸ノートについては別に記すが、他のハーンの教え子の学生の受講ノートには見られない岸の貴重な記述がみられる。ハーンは第３学期を残して退官し、代わりに夏目金之助（漱石）、上田敏、アーサー・ロイドが任命された。３講師の講義は、岸によって筆記されている。

1903（明治36）７　東京帝国大学卒業。

1904（明治37）４　埼玉県立熊谷中学校教諭。11月、小樽中学校教諭。

1908（明治41）９　熊本中学校教諭。

1909（明治42）10．30　第四高等学校教授。

1922（大正11）６．22　英語及語学教授法研究のため満一年半、英国及米国へ留学。

1924（大正13）４．30　帰朝。

1933（昭和８）４　英語科長。

1941（昭和16）　２月、叙勲二等瑞宝章。３月、北星堂より *Lafcadio Hearn's Lectures on Tennyson* 出版。３月29日退官。６月４日、第四高等学校名誉教授。

1946（昭和21）９．６　第四高等学校講師。

1951（昭和26）１．31　「北国文化」２月号第61号（英文学特集）に「ラフカディオ・ハーン先生の追憶」を掲載。

1951（昭和26）２．７　脳出血のため在職中に逝去。

学術論文には次のものがある。

⑴シャーロット　ブロンテ

⑵ On the Necessity of Reform in Our Language.

⑶英詩について

⑷ボストン大学のコンヴヲケーション

⑸Varsity Race

⑹世界戦争後英国で最も売れた本

⑺Mrs. Florence L. Barclay (Her Writings)

金沢大学附属図書館の「岸文庫」は、岸重次名誉教授が昭和26年に逝去後、馨夫人が教授の蔵書を昭和30年寄贈したもので、収蔵数は1,010冊、その殆どが英語英文学関係の洋書である。(注29)

ハーンは岸が、第３学年２学期末の1903年３月末、１学期を残して途中退官した。この１学期間は、後任として夏目金之助（漱石）(注30)、アーサー・ロイド、(注31) 上田敏(注32)の３講師によって講義は引き継がれた。岸はハーンの講義ノート数冊と、後任者たちの講義ノートを卒業後合冊して、８冊に装丁している。このため、前後のつながりがはっきりしないところもある。

８冊の受講ノートを下記［表３］にまとめる。

［表３］

⑴Lectures on English Literature, Vol. 1, 1900年10月～1901年11月

⑵同上　Vol. 2, 1901年11月14日～1902年５月22日（後ろに、上田敏の講義を筆記[写真39]している）

⑶同上　Vol. 3, 1902年９月～1903年３月（ハーン最後の講義 “Note on Whittier” の筆記あり）

⑷ Special Lectures on English Literature, Vol. 1, 1901年９月．火曜の講義

⑸同上　Vol. 2, 1901年11月～1902年４月金曜の講義

⑹ A History of English Literature, Vol.1, 1900年

⑺同上　Vol. 2, 1902年（後ろに A.ロイドの講義を筆記[写真40]）

⑻同上　Vol. 3, 1902年（後ろに夏目漱石の講義を筆記[写真41]）

８冊の受講ノートについて述べると、受講後大切な箇所には朱のインクで単語に下線を施し、また欄外の余白には特に重要な言葉などを記入している。第３学期を残してハーンが解任され、その後の講義は上述の３講師に引きつがれたが、１学期間であったので、岸のノートには、ハー

ンの受講ノートの後ろに３講師の講義が綴じられている。上田敏は、前記の［表３］の⑵に、アーサー・ドイロは［表３］の⑺に、漱石は［表３］の⑻のノートに書かれている。上田敏の講義は学生に人気がなかったようで、岸は「只二回出席」したのみであった。アーサー・ロイドの講義は「以下 Arthur Lloyd 氏の講義」の鉛筆書きの次の頁から Tudor period of English Literature のタイトルに続き Scotch Influence, Edmund Spenser, Ben Jonson, Four prose-writers of the age of Elizabeth,... が1903年５月まで行われた。岸は７月に卒業するが就職していなかったので、卒業後もロイドの授業を受講、筆記している。10月には中学校教諭に赴任のため受講はできなくなった。ロイドは英文学史を講じた。［表３］の⑻の漱石については「こだま」139号(注33)において、梶井重明氏が述べておられるので、ここでは概略を記す。漱石の講義は123頁にわたり筆記されている。「以下夏目漱石先生ノ講義」と鉛筆で書かれている。筆記の文字は、ハーンの受講ノートとは異なり、た易く読めるものではない。漱石の東大での講義は、早口だったのであろうか。この講義のタイトルは “General Conception of Literature” で、のちに４名の学生のノートを照合して出版されている。大正６年版の岩波の『漱石全集』別冊補遺で「英文学形式論」－明治36年４月より６月迄東京帝国大学文科大学に於て講〔皆川正禧筆記〕のタイトルである。1903年（明治36）７月卒業の皆川正禧・野間眞綱（岸と同期）、1904年卒業の小松武治、1905年卒業の吉松武通の４氏のノートを照合したものである。

岸は前記［表３］の⑶のノートの最後に書かれた “Note on Whittier” について、『北国文化(注34)』で「先生が去られることがきまってからは、講義も調子がかわり、非常に速くなり、発音もはっきりせず、筆記に困難となりました。最後の講義は Note on Whittier であったが、これを完全に筆記し得たものはぼくぐらいなものだった。後年昭和９年９月北星堂で先生の講義を出版（筆者注 *On Poets*）するとき、はるばる金沢にいるぼくのところまで、ノートを借りにきたほどでした。」と書いている。岸は “Note on Whittier” の部分だけ、講義中に筆記した上にこれを清書した別の紙をはっている。この講義の一つ前の講義では、ノートの余白に「眠い眠い」[写真38] “Sleepy” と書いている。理不尽な事情から東大を追われ、情熱を失ったハーンの講義に対するやり場のない怒りを “Sleepy” という言葉で表現せざるを得なかった岸の心情には、時代を超えた共感を感じざるを得ない。

５．駒井徳太郎　略年譜

1871（明治４）10．20　奈良県高市郡高取町大字下子島６番邸で生まれる。

1886（明治19）５　大阪府高市郡土佐小学校卒業後、明治22年１月まで同郡越智岡村、梁瀬我聞に就き、同年２月より８月まで同郡船倉村、藤井十平に就き漢学を修む。

1889（明治22）９．10　京都市上京区烏丸御池下ル、平井金三に就き、24年７月まで英学を修む。この頃、後述する折戸徳三郎も、京都の顕道学校で平井金三から英語を学んでいる。

1891（明治24）10．１　東京市神田区駿河台鈴木町成立学舎に入り翌25年８月迄普通学を修む。

1892（明治25）９．14　第二高等中学校豫科第１年級に入学。

1894（明治27）　高等学校令により、京都の第三高等学校から、大谷正信、河東碧梧桐、高浜虚子らが、第二高等学校へ転校してくる。

1895（明治28）　私蔵の、和紙２枚に毛筆で書かれた「五城放子大刀環聽余三疊譜陽関」に始まる「七言古詩[写真44]」がある。「送大谷繞石帰其郷」と書かれ、日付は七月一日で、作詩者は「青雲」と読める。金沢大学附属図書館「駒井文庫」蔵の駒井自筆の原稿と筆跡を比べると、ほぼ駒井が書いたも

のと考えられる。これはこの年夏休みに故郷松江に帰省した大谷に贈られたものである。また「駒井文庫」には駒井自筆の大谷正信に関する資料がある。二高の生徒同友会「尚志会(注35)」の第五回大会（11月24日）に於て行われた、友人達の弁論の模様を記したもの[写真45]で、やはり、和紙に毛筆で書かれている。「大谷氏の英文朗読は流石文学に志ある人のことなれば秋夜天寂に往事を追憶せられしの餘瀝聴者をして知らず知らず自己の境域に反響せしめしはいとめでたかりき」とある。

1897（明治30）７．10　第二高等学校大学豫科第一部卒業。９月30日、帝国大学文科大学漢学科に入学。在学中、ハーンの講義を受講する。

1900（明治33）６．11　駒井は、卒業を前にしてハーンに手紙を出す。ハーンは早速返書を送る。今回、駒井家からこの往復書簡を拝借し、金沢大学資料館の特別展に展示することができた。（駒井からハーン宛の手紙は、下書きである）ハーンの返書は、駒井が『英文学研究』２巻１号（1931）に“Lafcadio Hearn の手紙”として発表している。平成11年、雑誌「へるん」36号（八雲会1999. ６）で、京都府立大学名誉教授・桝井幹生氏が、駒井の往復書簡について発表されている。本稿では桝井幹生氏の翻訳文を掲載する。

駒井徳太郎・小泉八雲往復書簡
－付録　駒井徳太郎試験欠席願い

①駒井から八雲へ

拝啓

小生、大学卒業を来月にひかえた今、先生の御講筵と永久にお別れしなければならないときにあたり、先生にたいする深甚の謝意をここに表明することをお許しください。できることならば先生の御講義を拝聴するためもっと長く在学したい気持ちで一杯です。先生の御講義は大学での過去三年間で受けたもののうち最も啓発的且つ暗示的な授業、少なくともそのような授業の一つでありました。わけても先生の英詩人に関する御講義は、かの詩人たちが同胞たちに多くの貴重且つ恒久の思想を付与し、さもなくば、暗愚のまま慰めもなき人々に晴朗且つ温和なる光明を投げかけたがゆえに、小生にとり世の諸相、人間を観る眼が新しく開けた想いがいたしました。新しき思想はつねに高きを目指すものにとり有難いものであります。特に小生にはそうでありました。実を申しますと、小生は中国文学専攻でありまして、小生の関心事はこれまで主として西洋的というよりもむしろ東洋的なものの考え方に片寄っていました。これに関してはもっと多く述べたいところですが、小生の心の内を先生に伝える術も知らず、また言葉足らざるの恨みがあります。かるがゆえに、もし小生の貧しくも拙い言葉が感謝の気持ちを少しなりとも先生にお伝えできたとしたら、小生の喜びこれに過ぎるものはありません。

敬 具

小泉先生　玉案下

駒井徳太郎

［明治 33（1900）年６月11日］

---

②八雲から駒井へ

親愛なる駒井君

君のご懇篤なる手紙は、君が小生に与えようと意図した喜び、いやそれ以上のものを与えてくれました。その「それ以上のもの」について書きましょう。君は何か自信なげに自分は東洋的な思考や感情のみを愛し、西洋思想はただ単に東洋思想に与えるたまさかの新しい光や力として研究するための方法論だと言っていましたね。でもね、駒井君、それこそがいかなる西洋文学研究のアプローチにとり最良の心構えなのですよ。もし小生のすべての日本人学生に君と

同じように考えさせることができたら、すごく嬉しいでしょうね。英文学でもどの国の文学でも、日本人学生がその研究で日本文学をより豊かなものにする方法や示唆を見出さない限りおそらくなんの価値もないでしょう。何でも新しいもののみ価値ありと思い、数千年に及ぶ祖先の貴重な遺産を捨ててもいいと思う学生がいま多くいます。これは愚かなことです。どんな進歩も基礎なくしては成し遂げられないからです。そして道徳的にも芸術的にもあらゆる基礎の内でもっとも強固で最善のものは祖先の英知です。すべての日本の文学徒が君のように考えてくれたら、素晴らしい業績があげられるでしょう。でもそのように考えない限り、彼等はいつまでたっても西洋の詩や散文のひどい物まねしかできないでしょう。

お手紙どうも有難う。来年君の姿が教室に見られなくて淋しくなることは言うまでもありません。でも君が将来文学研究においてまさに正しい方向に歩んでいくだろうという確信を得て心慰められる想いで一杯です。

敬 具

小泉　八雲

1900年６月16日

---

③駒井徳太郎の試験欠席願い

小泉教授

フローレンツ教授

フォン・ケーベル教授

私儀、已むを得ざる事情により帰省を余儀なくされ、ためにこの度の試験受くることかなわざるにつき、来学年当初に追試験許可されたく願い申し上げ候。

駒井徳太郎

（中国文学１年）

下に３名の教授のサイン

Y. Koizumi

Von Koeber

Dr. Florenz

７月10日　東京帝国大学文科大学漢学科卒業。

1901（明治34）５．７　和歌山県徳義中学校教諭。

1905（明治38）６．28　石川県立第四中学校長（現、小松高校）。

1908（明治41）７．27　第四高等学校教授。

1928（昭和３）８．29　叙勲三等授瑞宝章。

1932（昭和７）３．31　第四高等学校を退官。４月１日、講師となる。

1941（昭和16）３．31　講師を退く。

1950（昭和25）12　駒井徳太郎逝去。

1955（昭和30）９　駒井徳太郎の旧蔵書を金沢大学に寄附したことにより、次男、知包氏は紺綬褒章を受賞。

６．林　　並木　略年譜

1873（明治６）５．18　高知県高岡郡佐川町字西町27番地で生まれる。

1886（明治19）　高知県尋常中学校に入学。

1891（明治24）７　同校卒業。

1892（明治25）９　第三高等中学校豫科第一級に入学。

1894（明治27）７　同校本科一部文科志望の学科第一年級修了。９月、学制改革により第三高等学校豫科を設置せられたるに依り、第二高等学校大学豫科第一部文科第二年級に転入。

1895（明治28）７　第二高等学校大学豫科第一部文科志望の学科卒業。９月、帝国大学文科大学英文学科に入学。

1898（明治31）７．10　東京帝国大学文科大学英文学科卒業。９月、京都高倉真宗大学教授。

1901（明治34）12．31　真宗大学を辞す。

1902（明治35）１．20　第四高等学校講師。３月４日、第四高等学校教授。

1904（明治37）９．26　ハーン逝去。ハーンの教え子で、当時四高教授であった茨木、林、

田部の３名は、小泉セツ、小泉一雄から香典返しを受け、３人連名でその礼状を送ったと茨木の日記に書かれている。

1917（大正６）２．21　英語学及び教授法研究の為、満１カ年半、米国へ留学。

1918（大正７）３．13　英国を留学国に追加される。11月30日、北米合衆国で留学中の処、帰国。

1932（昭和７）３．31　第四高等学校を退官。４月１日、講師となる。４月５日、第四高等学校名誉教授。

1958（昭和33）10．21　林並木脳出血のため逝去。

７．長屋　順耳　略年譜

1874（明治７）２　岐阜県美濃国八郡大垣町新馬２番に生まれる。

1885（明治18）　岐阜県岐阜中学校へ入学。

1890（明治23）　岐阜県尋常中学校卒業。第三高等中学校へ入学。

1894（明治27）　第三高等学校本科卒業。帝国大学文科大学英文学科入学。ハーンの講義を１年間受講。

1897（明治30）７　東京帝国大学文科大学卒業。同月、東京帝国大学大学院へ入学。ハーンの東大での英文学科教え子のうち、11名が大学院へ進んだ。大学院での研究課題は、それぞれ次のようであるが、長屋順耳の研究課題は分からない。

明治30卒　上田　敏　希臘古典ト英文学トノ関係
〃　土井林吉　ヴィクトリア朝大詩人ノ理想極致
明治32卒　龍野元四　十九世紀ニ於ケル英詩ノ発達
〃　戸澤正保　「シェークスピア」ノ戯曲
明治34卒　栗原　基　ヘブライ文学ノ英文学ニ及ボセル影響ニ就キ
〃　内ケ崎作三郎　英文学ニ於ケル宗教ノ影響
明治36卒　石川林四郎　英文学ニ於ケル動植物ノ文学的価値
〃　安藤勝一郎　英国詩人ノ自然観ニ関スル事項
〃　竹山成美　最近英文学史

1898（明治31）８．21　第四高等学校講師。８月25日教授。

1904（明治37）４．18　第四高等学校教授を辞し、広島高等師範学校教授。

８．西川　　巖　略年譜

1901（明治34）９月、東京帝国大学文科大学英文学科に入学し、ハーンの講義を１年７ヵ月間受講した。

1904（明治37）７月卒業。

1908（明治41）８　大谷正信と同日に第四高等学校教授となる。西川がハーンの教え子で、東大卒業後第四高等学校教授に赴任したことが、最近西田圀夫氏の調査で判明した。「東京大学一覧」によると同期生には五高、三高、京都大学教授となった厨川白村（くりやがわはくそん）がおり、『小泉八雲先生そのほか(注36)』で東大講義について書いている。

1914（大正３）四高教授辞任。

(注)11～36

⑾　田部隆次『西田幾多郎の手紙』斉藤書店、昭和22．10．20，p．3。

⑿　京都帝国大学創立のため1897（明治30）６．18から、帝国大学は東京帝国大学と改称。

⒀　拙稿「田部隆次と師・外国人教師達」『へるん』34号、1997．６．27。

⒁　拙稿「おぼろ影」『へるん』26号、1989．６．27。

⒂　私蔵の田部の資料には『西田幾多郎の手紙』のp．6，7と同様の記述がある。

⒃　南日恒太郎、田部隆次、田部重治は、英文学者三兄弟である。

⑰　前掲書、注⑪、p. 193。

⑱　拙稿『ヘルン文庫の探究』馬場公園を愛する会（富山）、1998．10．15。

⑲　角田柳作からアメリカへ図書、絵画等を送るので、日本側の主任となるよう依頼された。事務に関する費用は一切三菱が出し、宮内省、三井、住友から相当の寄附を受けた。

⑳　大谷正信「個人としての小泉八雲」『帝国文学』小泉八雲記念号、帝国文学会編、第10巻第11号、明治37．11．10，pp. 94－95。

㉑　大谷正信「小泉先生を憶ふ」『明星』東京新誌社、明治37．11。

㉒　財界評論社、昭和47．10，p. 241。

㉓　拙稿「金沢市池田町界隈」前掲書（注５）。

㉔　根岸磐井（1874－1933）根岸家は旧松江藩士族。ハーンはセツとともに明治24年６月から熊本へ去る11月半ばまでここに住み、『知られぬ日本の面影』の「日本の庭」で根岸邸の庭を描いた。現在も根岸家の人々によって、当時のままの面影をとどめている。磐井は『出雲ニ於ケル小泉八雲』（八雲会、昭和５．４）を出版した。

㉕　『英語青年』大正11．９．１。

㉖　拙稿「大谷正信と犀川氾濫」前掲書（注２）。

㉗　翻訳者は、ハーンの教え子、大谷正信、田部隆次、林並木、石川林四郎、小日向定次郎、土井林吉、戸川秋骨、戸沢正保、金子健二、落合貞三郎、岡田哲蔵、京都帝大英文科出身ハーン次男の稲垣巖であった。

㉘　山口蚊象（1902－1978）前掲書（注18）。

㉙　拙稿「小泉八雲と岸文庫」『こだま』100号記念特集、金沢大学附属図書館、1991．１．１。

㉚　夏目金之助（漱石）（1867－1916）夏目鏡子・松岡譲『漱石の思い出』角川書店、昭和48．４．30「黒板の似顔絵」p.115 で「小泉先生は英文学の泰斗でもあり、また文豪として世界に響いたえらい方であるのに自分のような駆け出しの書生上がりのものが、その後釜にすわったところで、とうていりっぱな講義ができるわけのものでもない。また学生が満足してくれる道理もない」と漱石が洩らした、と記している。『三四郎』で、漱石はハーンを披露している。

㉛　Arthur Lloyd（1852－1911）ハーン後任として明治36年、井上哲次郎の推薦で東大の英文学教師となる。ロイドの職名は教師であったが、漱石、上田敏は講師であった。（『近代文学研究叢書』12巻、昭和女子大学光葉会、昭和34．４．５，p. 250）

㉜　上田敏（1874－1916）帝大で１年間、ハーンの講義を受講。ハーンからその学力を「一万人中一人の学生」と激賞された。

㉝　梶井重明「夏目漱石の東大最初の講義録・岸重次のハーン講義受講ノートの中より発見」『こだま』第139号、金沢大学附属図書館、2000．10．１。

㉞　岸重次「ラフカディオ・ハーン先生の追憶」『北国文化』61号、昭和26年。拙稿「東大退官前後のハーン」『へるん』25号、1988．６．27。

㉟　『資料集成　旧制高等学校全集』第７巻、旧制高等学校資料保存会、1984．６．25の「第二高等学校尚志会の会則」によると、尚志会には４部あり、そのうちの１部が文藝部で、駒井、大谷が属していた。日本語、外国語の講演、詩文朗読文章批評等を行っており、駒井は大谷の英文朗読について書いたのである。

㊱　厨川辰夫（白村）「小泉先生」『小泉先生そのほか』積善館、大正８．２．20，pp. 1－47。

[茨 木 清 次 郎]

卒業證

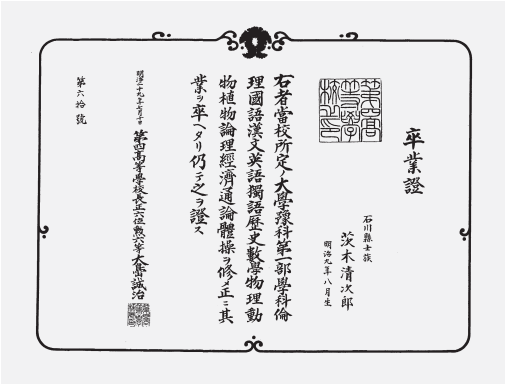
石川縣士族
茨木清次郎
明治七年八月生

右者當校豫科トシテ尋常中學科ヲ修メ正ニ其業ヲ卒ヘタリ仍テ之ヲ證ス

第四軍學校教授正七位勲六等大島義脩

第百四拾號

［写真13］茨木家蔵　37×48



卒業證

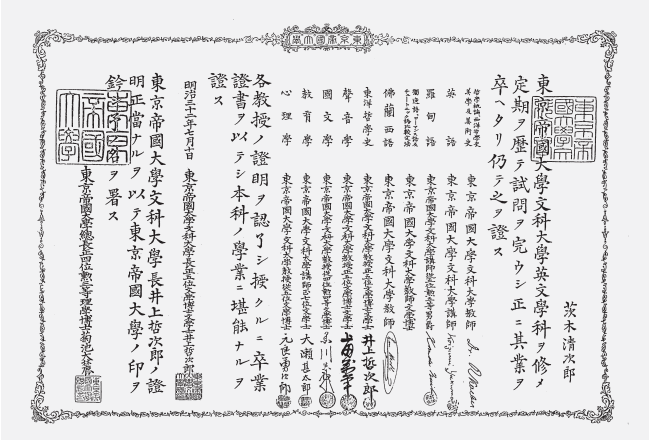
石川縣士族
茨木清次郎
明治七年八月生

右者當校所定大學豫科第一部學科倫理國語漢文英語獨語歷史數學物理動物植物論理經濟通論體操ヲ修メ正ニ其業ヲ卒ヘタリ仍テ之ヲ證ス

第四軍學校教授正七位勲六等大島義脩

第六拾號

［写真14］茨木家蔵　37×48



東京帝國大學文科大學英文學科ヲ修メ定期ヲ歷テ試問ヲ完ウシ正ニ其業ヲ卒ヘタリ仍テ之ヲ證ス

茨木清次郎

東京帝國大學文科大學教師
東京帝國大學文科大學講師
東京帝國大學文科大學教師
東京帝國大學文科大學教師
東京帝國大學文科大學教師
東京帝國大學文科大學教師
東京帝國大學文科大學教師
東京帝國大學文科大學教師
東京帝國大學文科大學教師
東京帝國大學文科大學教師
東京帝國大學文科大學教師
東京帝國大學文科大學教師

羅甸語
佛蘭西語
東洋哲學史
聲音學
國文學
教育學
心理學

各教授ノ證明ヲ認ムシ授クルニ卒業證書ヲ以テシ本科ノ學業ニ堪能ナルヲ證ス

明治三十三年七月十日

東京帝國大學文科大學長井上哲次郎ノ證明正當ナルヲ以テ東京帝國大學ノ印ヲ鈐ス

東京帝國大學總長菊池大麓

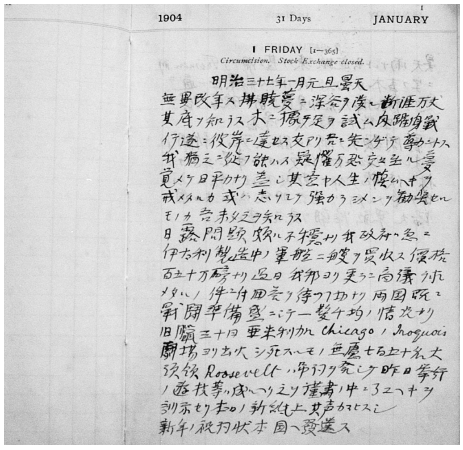
［写真15］茨木家蔵　47×65

［写真16］茨木家蔵

［茨木清次郎］

向って前列右端　田部　となり　茨木

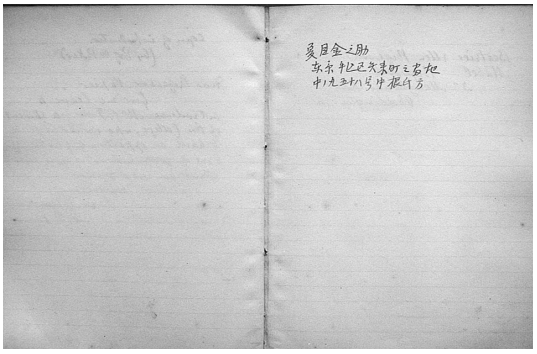
［写真17］茨木家蔵



1904　31 Days　JANUARY

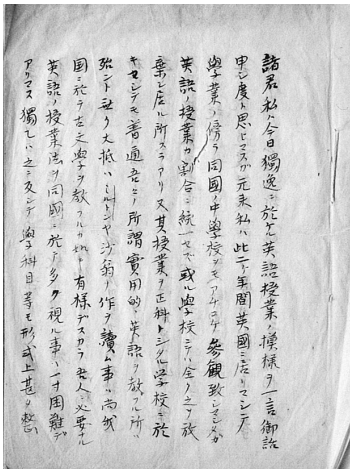
1 FRIDAY [1—364]
Circumcision. Stock Exchange closed.

［写真18］留学中の日記 茨木家蔵



［写真19］留学中の住所録 茨木家蔵

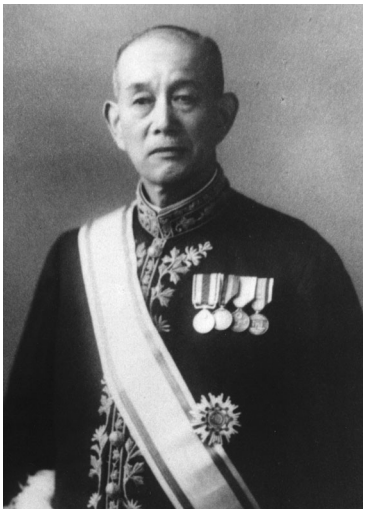
［写真20］茨木家蔵



［写真21］講演原稿 茨木家蔵

［茨木清次郎］

［写真22］茨木家蔵



［写真23］茨木家蔵

［写真24］茨木家蔵

［写真25］東京にて四高同窓会 茨木家蔵

［田　部　隆　次］

後列　向って左より３人目、牧野　４人目茨木
中央　左端　大谷
となり　田部　４人目　浅野

［写真26］明治32年東大英文学科卒業生　小泉時氏蔵

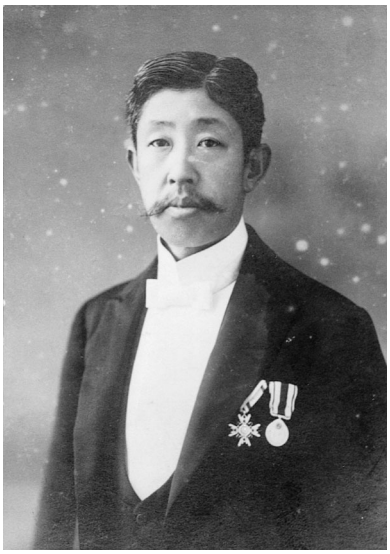
後列　向って左より２人目、田部
中央　左端　茨木
右より２人目　西田

［写真27］『西田幾多郎の手紙』より　三々塾　明治40年

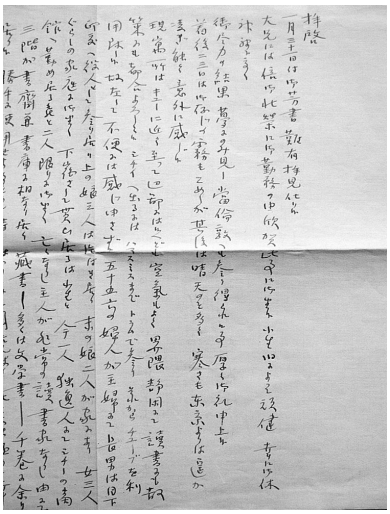
［写真28］1935．８　田部隆次　小泉家の庭にて 染村蔵

［写真29］1935．８ パーキンズ一家と小泉家の庭にて　染村蔵

［大　谷　正　信］



［写真30］大谷正信　染村蔵



［写真31］1910. 2. 21 大谷から茨木宛書簡　茨木家蔵

［写真32］*Insect Literature* より北星堂1921より

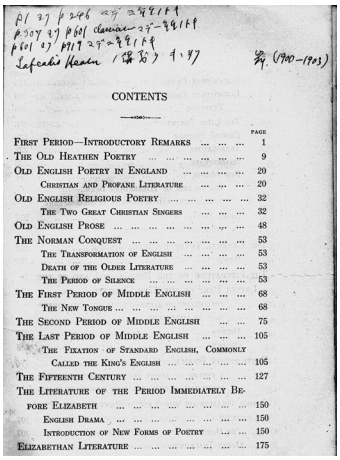
［写真33］犀川の氾濫　染村蔵

［写真34］根岸磐井　根岸道子氏蔵

［写真35］1932. 10. 26 市河三喜夫妻　松江・八雲旧居　染村蔵

［岸　重　次］

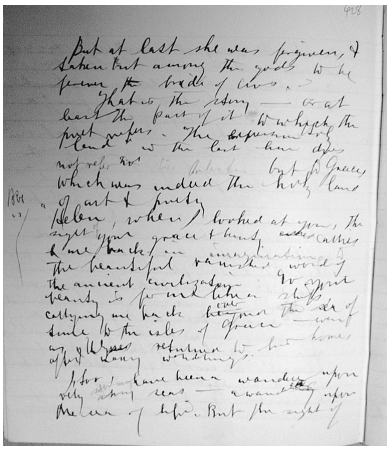
［写真36］岸重次



CONTENTS

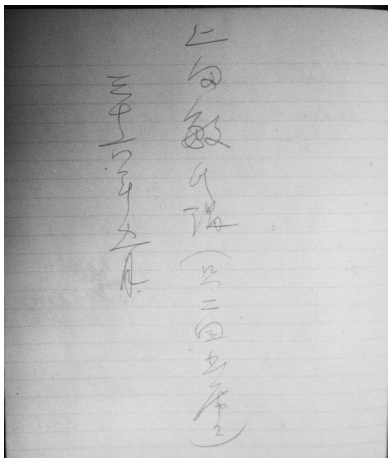
	PAGE
First Period—Introductory Remarks	1
The Old Heathen Poetry	9
Old English Poetry in England	20
Christian and Profane Literature	20
Old English Religious Poetry	32
The Two Great Christian Singers	32
Old English Prose	48
The Norman Conquest	53
The Transformation of English	53
Death of the Older Literature	53
The Period of Silence	53
The First Period of Middle English	68
The New Tongue	68
The Second Period of Middle English	75
The Last Period of Middle English	105
The Fixation of Standard English, Commonly Called the King's English	105
The Fifteenth Century	127
The Literature of the Period Immediately Before Elizabeth	150
English Drama	150
Introduction of New Forms of Poetry	150
Elizabethan Literature	175

［写真37］ハーンの『英文学史』に岸の記入 金沢大学附属図書館蔵

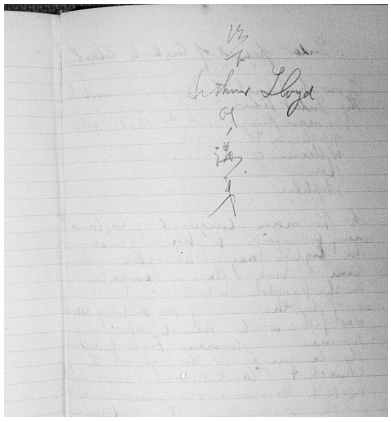


［写真38］眠い眠い 金沢大学附属図書館蔵

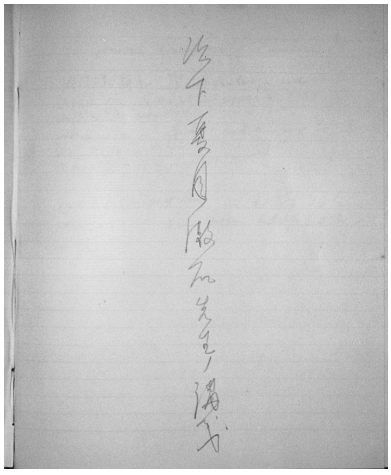
［岸　重　次］



［写真39］金沢大学附属図書館蔵



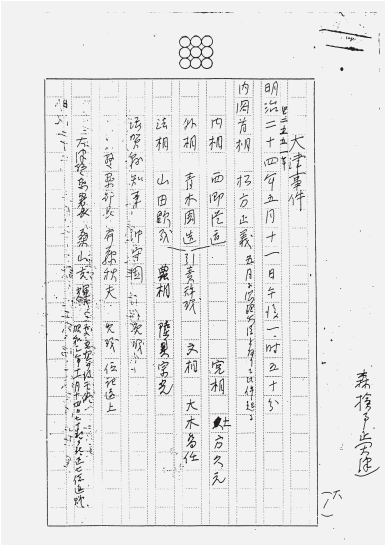
［写真40］金沢大学附属図書館蔵



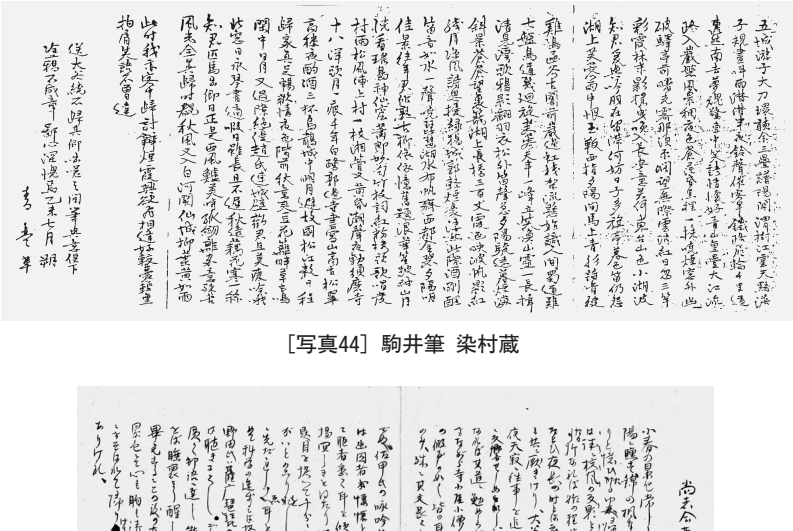
［写真41］金沢大学附属図書館蔵

[駒井徳太郎]

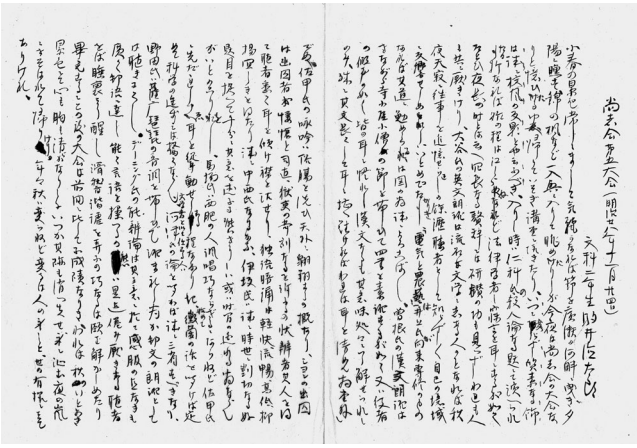
［写真42］駒井徳太郎『小松高等学校百年史』より



［写真43］駒井筆　大津事件資料 金沢大学附属図書館蔵



［写真44］駒井筆 染村蔵



［写真45］駒井筆 金沢大学附属図書館蔵

Ⅳ　ハーンの作品創作の協力者たち

ハーンの創作協力者として、従来セツ夫人と大谷正信（Ⅲの３で既述）が多く述べられてきた。重要な協力者としての雨森信成については、山下英一氏の研究によって雨森の全体像が明らかとなってきた。折戸徳三郎については殆ど言及されることがなかった。私は私蔵の雨森、折戸の資料に基づき、また折戸については折戸家からの貴重な資料も拝借して、従来いわれていない事実を記し自筆の原稿、写真等を本章末に掲げる。

１．雨森　信成　略年譜

1858（安政５）２．１　福井藩士、松原十郎の三男五女の次男として出生。

1871～1873（明治４～６）　福井藩校、明新館でお雇い教師、英国人、A.ルセーから英語を、同米国人 W. E. グリフィス(注37)から理化、独語、佛語を学ぶ。横浜に出て米国人宣教師 S. R. ブラウン夫妻に学び、さらに一時、開成学校で学ぶ。父、松原十郎の義弟、雨森雨膳の養子となる。先祖は雨森芳洲。

1875（明治８）　雨森家との養子縁組を解消される。キリスト教信者になったことを嫌われたためで、養母（叔母）に対する孝行の意味で雨森姓を継いだが、かわりに弟、元成が雨森家の養子となる。横浜のメリー・キダー創立の学校（現フェリス女学院）の教師となる。

1877（明治10）　築地の東京一致神学校（現明治学院）開校と同時に入学。

1878（明治11）　准允免状を受ける。植村正久と上州へ、本多庸一と上総房州へ伝道活動を行う。

1882～1897（明治15～20）　ワイコフの先志学校（後、明治学院に合流）で教師の職に就いた後、日本を離れ、朝鮮、中国、パリ、ロンドン、米国へと渡航しているが、これは、国の政治思想に反する言動があったため、とも、或いはキリスト教の西洋の道徳に及ぼす影響を実際に見るため、ともいわれているが、いずれにしても帰国した雨森は、保守主義者―或る意味で国粋主義者となっていた。岡山県の児島湾開拓事業も手がけたが成功はしなかった。

1888（明治21）　高知県出身の佐々木高行伯爵等、欧化主義に対抗する人々が設立した「明治会」の機関誌『明治会叢誌』を編集し、論文を掲載する。以上、山下英一著『グリフィスと日本』近代文藝社1955による。

以下、私蔵の雨森からハーン宛の手紙・資料を中心に述べる。

1890（明治23）４．４　ハーンが来日し８月30日、島根県尋常中学校へ赴任。

1891（明治24）11月　ハーンは熊本の第五高等学校教師となる。この頃、ハーンの親友で横浜在住の M.マクドナルドは、ハーンに雨森を紹介した。ハーンと雨森との交際は明治33年頃まで続く。雨森は、横浜元町(もとまちせん)浅間山(げんやま)(注38)に住み、茶店を営み、クリーニング業を手広く行っていた。ハーンの創作活動に協力するため、ハーンの求めに応じて日本に関する資料を英訳し、提供した。ハーンは、この資料提供に対する対価を払っていた。私蔵の雨森からハーン宛の受領の手紙がある。

1892（明治25）　２冊のガイドブック(注39)を書く。第１冊目は帝国ホテルの案内書で、*Teikoku (Imperial) Hotel Guide Book For Tokyo,* 1892. 3. 28、村尾智実発行、国会図書館蔵。第２冊目は、横浜グランドホテルの案内書で *The Grand Hotel, Ltd. Guide book for Yokohama and Immediate Vicinity,* no date 横浜開港資料館蔵である。

1894（明治27）10　ハーンは、第五高等学校を退官し、「神戸クロニクル」社に転職。

雨森の手紙の日付は、すべて西暦でなく、

紀年の表記である。この年、1894年に書いた手紙には、2554と、紀元で書かれている。

1895（明治28）４　ハーン宛手紙で雨森は、自身の半生を “My life” という言葉で表現し、手紙ではなく、ハーンに会って話したい、しかし、聞いて落胆しないように、と述べている。この話をハーンは『心』（1896）の「ある保守主義者」にとりあげている。「詩人・学者・愛国者なる友人雨森信成へ」の献辞がある。雨森は、ハーンに協力するにとどまらず、自ら英語で文学作品を発表する場を求めて、ハーンに出版社の紹介を依頼している。作品掲載の執筆料を外人並に支払う、と申し出た出版社もあった。また、雨森が書いた文学作品の序文をハーンに依頼もしている。

1896（明治29）　２月10日 Lafcadio Hearn は、帰化して「小泉八雲」と改名。雨森は以後、「ラフカヂオ・ヘルン様　Lafcadio Hearn Esqr.」を「小泉八雲様　Y. Koizumi Esqr.」と改める。ハーンは、帝国大学文科大学英文学科講師となり、９月７日午後７時東京着、本郷の旅館に止宿。早速翌８日付で雨森に手紙を送る。上京したことを先ず雨森に知らせたかったのであろう。雨森は９日に受信して10日付でハーンに返書を送った。宛先は、ハーンが知らせてきた東京本郷区龍岡樓（旅人宿）ニテ　小泉八雲様である。10月16日、ハーンに「小泉八雲様行　Prof. Y. Koizumi」と封筒に書いた手紙を投函する。これに対しハーンからすぐ「自分はまだこう呼ばれる程えらいとは思わない。Professor はやめて欲しい」との返書がくる。11月12日「都々逸」の英訳原稿を送る。これは『仏の畑の落穂』（1897）の「日本の俗謡における仏教引喩」で使われる[写真47]。［写真47］の都々逸は、1910 年アメリカの F. N. Barbour によって作曲された。[写真48]　12月15日「勝五郎再生記」の英訳原稿を送る。[写真49]　これは『仏の畑の落穂』（1897）の「勝五郎再生記」で使われる。[注40]

1898（明治31）　明治26年土佐（高知県）から岩崎英重（号．秋月境川。『オリンポスの果実』の著者田中英光の父）が佐々木高行伯爵を頼って上京していた。岩崎は、初め、雨森同様『明治会叢誌』の編集に携わっていたが、同誌は明治32年に廃刊となった。廃刊の前年岩崎は「興雲閣出版」を興し、雨森らと論文[注41]を発表した。雨森は『逆風帳帆』で、「雨森未孩」の筆名を用い「政治界の動力と反動力」「愛国心と四海同胞主義との関係」「兎狩」を、『無聲觸鳴』では、「敬租の念」「過未二途の空想」「觸」「読書弊」を執筆した。

９．４　ハーンの質問に答えて、『骨董』（1902．10）の「餓鬼」の英訳資料を送る。翌日付の礼状でハーンは、「餓鬼」にまつわる物語を催促。これに対し、雨森が送った資料や手紙は残されていないが、「餓鬼」の作品中にある「樹中餓鬼」に付された注の物語であると私は考える。私は、この注の物語の原典は、富山大学附属図書館「ヘルン文庫」蔵の『通俗佛教百科全書』上巻（明治31．10．15）、第90の「鬼神木をきらぬ事」であると特定した。[注42]

1900（明治33）　ハーンの長男、小泉一雄『父小泉八雲』によると、この頃までハーンと雨森の交流はあったが、ハーンへ提供した資料につき、雨森がうかつにも公表した等のため、両者の関係は疎遠になる。ハーンは著作の協力者が存在することを公表したくない、とかたくなに考えていた。やはり同じ頃、同じ理由で大谷正信もハーンとの関係が疎遠になる。

1901（明治34）　ハーンはセツ夫人の遠戚にあたる三成重敬（みなりしげゆき）[注43]を協力者として得る。三成は英語には堪能ではなかったが、東京大学資料編纂所に勤務しており、一級の資料をハーンに提供することができた。日本語で書かれた資料は後述する折戸徳三郎によっ

て英訳され、ハーンに届けられた。

1904（明治37）９．26　ハーン逝去。マクドナルドとともに告別式に参列。

1905（明治38）10　アメリカの雑誌 *The Atlantic Monthly* に "Lafcadio Hearn, the Man"(注44)（「人間・ラフカディオ・ハーン」）を発表。この論文は、ハーンが雨森に送った手紙を抜粋し、「煩わしさを避けるため」日付を一切省略して書かれている。雨森はこの論文を書くにあたり、ハーンの日付入りの（一部 n. d.）手紙を書き写した資料ノートを用意した。私蔵のこのノート[写真50]には、約60通のハーンの手紙が抜粋されそれぞれ Sympathy, Friendship など、５つの項目に分類されて筆写されている。"Lafcadio Hearn, the Man"に採用されなかった手紙もある。これ等のハーンからの手紙は、関東大震災で焼失したといわれている。

1906（明治39）３．１　雨森信成逝去。

２．折戸徳三郎　略年譜

1871（明治４）６　島根県益田に生まれる。(注45)

1876（明治９）２．８　折戸梅八の養子となる。

1887（明治20）４．29　小学校卒業後、すぐ中学へは入学せず顕道学校（京都府油小路花屋町上ル）に入学のため上京。２年間在学し、平井金三から英語を学んだ。松江の中学校の同級生との年齢差があったのはこのためである。

1889（明治22）９　島根県尋常中学校に入学。

1890（明治23）９　中学２年のときハーンが英語教師として島根県尋常中学校に赴任。ハーンのために民話を収集し、英訳する。

1891（明治24）11．24　ハーンは、熊本の第五高等学校の英語教師として松江を離れる。

1892（明治25）７．19　折戸家に「島根県尋常中学校学期試業成績表」（明治25年７月19日）がある。

1893（明治26）７　中学校卒業。

1894（明治27）10　ハーンは第五高等学校を辞し、「神戸クロニクル」社に転じる。この頃折戸は、「雪の進軍」（明治27、永井建子作詞作曲）を英訳しているが、ハーンの作品にはない。

1896（明治29）　ふじと結婚。長女・菊枝出生。９月、ハーンは帝国大学文科大学英文学科へ赴任のため東京へ。11月19日、折戸は島根県尋常中学校の書記となる。

1897（明治30）１．23　中学教頭、西田千太郎を見舞うが、西田は３月15日逝去。折戸家によると６月、ハーンの招きにより中学校書記を辞し上京した。住居はハーンの家の近くの牛込である。上京後は逓信省、外務省に勤務したといわれている。しかし両省に問いあわせたが記録は残されていない。

1899（明治32）　長男・梅太郎出生。

1904（明治37）　折戸夫人が病気になり、一家は郷里、島根県石見国益田町に帰るがなお益田からハーンに資料の英訳を送る。８月５日、ハーン宛の最後の手紙には、次回の英訳に関する相談がなされており、９月26日にハーンが亡くなっていることから結局ハーンの資料英訳者としてはただ一人、ハーンが亡くなるまで協力したことになる。ハーンは晩年、長男・一雄をアメリカで教育することを考えていたが、折戸を伴って一緒にアメリカへ行く積りであった、と折戸の家族は語っている。12月31日付の、小泉セツ未亡人から折戸宛の手紙がある。(注46) ハーン逝去の折りの状況を伝えている。

1905（明治38）３．４　折戸夫人、ふじ逝去。32才。

1906（明治39）２　折戸徳三郎は家督を相続する。３月１日、小泉セツ未亡人から折戸へ手紙が送られる。アメリカで文集を作る（E. Bisland, *Life and Letters of Lafcadio Hearn*, 1906を指す）ので、ハーンからの手紙を保存していたら拝借したい、と書かれている。

1909（明治42）１．15　益田の『石見実業時報』

創刊とともに参画し、「呑空」の名で記事を書いた。一年で辞し、益田町学務委員となる。

1912（大正１）９．１　益田町助役就任。
1913（大正２）２．８　父、折戸梅八逝去。
1919（大正８）10．10　ナヲと再婚。
1920（大正９）８．23　益田町長に就任[写真51]。
1926（大正15）５．６　折戸徳三郎町長在職中に逝去。

折戸は、ハーンが松江の中学校教師時代の教え子で、中学校時代からハーンの逝去まで、ハーンのアシスタントとして、英訳の資料を提供し続けた。

自らを宣伝することのない謙虚な人柄であった。中学校で１年先輩にあたる大谷正信が、ハーンのアシスタントであることを公に発表して、ハーンの怒りをかったのとは対照的であった。田部隆次著『小泉八雲』その他の書簡集ではこれらの事情については、言及されていない。しかし折戸没後、ハーンの長男一雄は、東京時代、折戸一家が近くに住み、家族同士の付き合いもあって、折戸家の人々の事を２冊の著書『父「八雲」を憶ふ(注47)』と『父小泉八雲(注48)』で書いている。

折戸はハーンとの約束を守り、ハーン没後もハーンとの関係を、家族にも殆ど語らなかった。私は、私蔵の折戸資料をもとに、雑誌『へるん』、『八雲』に発表した。折戸家では、折戸が、松江の中学入学前に、京都の顕道学校に通っていたことを証明する資料が発見された。小泉一雄著『父小泉八雲』p. 132 で、「父の注文を忠実に守る善良な人で、中学校卒業だけの学力とは到底思えぬ程の仲々見事な英訳をする人であった…」と書かれているが、折戸は、顕道学校で、平井金三教授から英語の授業を受けたことが父母宛の手紙で分かった。[写真52] 学校での授業は、「顕道学校学科表[写真53]」によると、本科１年では、倫理、ナショナルリーダー第４、イーソップ物語、作文、会話、ガッケンブス小米国史等、12科目あり「読物ノ科書ハ漢籍ヲ除クノ外悉皆英書ヲ用ヒ音読訳読及意義ノ三ツヲ附帯シテ授クルモノトス」と説明が付されている。顕道学校に関する資料については、京都女子大学　宗教・文化研究所の中西直樹氏から貴重な資料と御教示を頂いた。顕道学校は、明治20年から22年の２年間で廃校になるが、折戸は、明治20年から22年春頃まで、顕道学校に在学し、平井金三(注49)から英語や佛教の授業を受けたことが分かった。同じ頃、駒井徳太郎も、前述の如く、京都の平井金三の英語塾で２年間学んでいる。

島根県尋常中学校の成績表が折戸家にある。明治25年７月、折戸が第４学年の時のもので、20名中、総点で３番であった。英作文は最高点である。また、ハーンのエンマ帳（「池田記念美術館」蔵）によると、折戸が３年の時の reading は98点、composition は89点、別の頁に書かれた compositionは very good が多く、29人中のトップクラスの成績である。

では、優秀な英語の成績を認められた折戸は、アシスタントとして、どのような協力をしたのであろうか。折戸が英訳したことが分かっている資料を以下に記す。実際には他に多くの英訳がなされた筈であるが、資料が残されていないので、詳細は分からない。

⑴『仏の畠の落穂』（1897）の「京都紀行」で、末慶寺住職・和田準然著「畠山勇子伝」の英訳。⑵『霊の日本』（1899）の「恋の因果」で三遊亭円朝著『怪談牡丹燈籠』の英訳。[写真56] これまでは「恋の因果」の原典は、布村弘の「夜窓鬼談」原典説もあったが、折戸の英訳資料により、原典は円朝『怪談牡丹燈籠』であることが判明した。(注50) ハーンは「恋の因果」を書くに当り、『怪談牡丹灯籠』の第２、６、８、10、12、14、16章のお露・新三郎の恋物語の部分を選んだのであるが、折戸の英訳は第２章だけ英訳されていない。これは、ハーンが第２章を必要としなかったからではなく、ハーンが当時所蔵していた B. H. Chamberlain, *A Handbook of Colloquial Japanese* 1898[写真55] に、『牡丹灯

籠』の第１、２章だけの英訳があったからである。⑶『霊の日本』の「日本の仏教俚諺」で「往生要集」の英訳。⑷同前書の「天狗譚」で「十訓抄」の英訳。⑸『影』（1900）の「普賢菩薩の話」で「十訓抄」を英訳。⑹『骨董』（1902）の「ある女の日記」を全文英訳。⑺同前書の「餓鬼」で「正法念処経」を英訳。⑻『天の川綺譚その他』（1905）の「天の川綺譚」で「萬葉集(注51)」を英訳。⑼同前書「化け物の歌」で『狂歌百物語』の序文[写真57]を英訳した。原典は色刷りの珍しい本であるので、モノクロではあるが写真（下巻７編）を掲載する。[写真58]

（注）37〜51

⑶⑺ William Elliot Griffis（1843－1928）福井藩のお雇い教師として来日 *The Mikado's Empire,* 1876 を著す。*The Japanese Fairy World*, 1880は、ハーンがアメリカ時代、すでに1884年に購入し、「七夕」物語には記入がある。ハーンの遺稿集『天の川綺譚その他』の「七夕」の物語はハーンが好んだ祭の物語であるが、アメリカ時代から興味を持っていた。拙稿「小ノート」の「天の川綺譚」前掲書（注５）。

⑶⑻ 拙稿「雨森信成と元町百段公園」前掲書（注13）。

⑶⑼ 拙稿「雨森信成とガイドブックス」『へるん』33号、1996．６．27。

⑷⑽ 拙稿「勝五郎再生記」の原典「ほどくぼ小僧前生話」前掲書（注39）。［写真49］は、雨森がハーンに送った英訳原稿の第１頁であるが、タイトル “Copy of the Report of Tamon Dempachirō” と「多聞伝八郎（おかどでんぱちろう）」を「多聞伝八郎（たもんでんぱちろう）」と誤読したために、ハーンも、日本の翻訳者（平井呈一は、のち「おかど」と訂正している。）も、「たもん」と誤記した。

⑷⑾ 拙稿「雨森信成と「富士新聞」「興雲閣」」前掲書（注13）。

⑷⑿ 拙稿「「餓鬼」と雨森信成・折戸徳三郎」『八雲』８号、小泉八雲顕彰会（焼津）、1995．９．26。

⑷⒀ 三成重敬（1874－1962）

⑷⒁ “Lafcadio Hearn, the Man” 1905は雨森がハーンの追憶文として掲載した英文である。ハーンは雨森を何を聞いても知らぬことのない人、日本に来た殆どあらゆる外国の著述家を、特にサー・エドウィン・アーノルド―を助けた人、彼は私がこれまで会った人のうち最も驚くべき人物の一人と評している。ハーンは雨森に多くの質問をし、雨森は的確に答えてハーンの創作活動に協力した。「人間・ラフカディオ・ハーン」は、高田力『小泉八雲乃横顔』北星堂、昭和９．11．８で、はじめて翻訳された。

⑷⒂ 拙稿「ハーンのアシスタンツの１人・折戸徳三郎」『へるん』32号、1995．６．27。

⑷⒃ 拙稿「小泉セツの折戸徳三郎宛書簡とE.ビスランドの小泉家宛書簡」『八雲』11号、小泉八雲顕彰会、1998．12．20。

⑷⒄ 小泉一雄『父「八雲」を憶ふ』警醒社、昭和６。

⑷⒅ 小泉一雄『父小泉八雲』小山書店、昭和25．６。

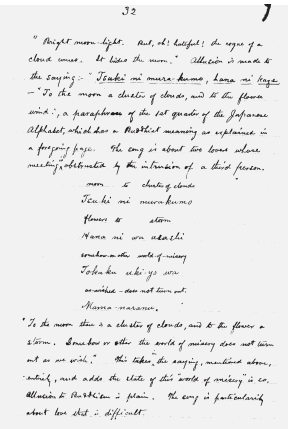
⑷⒆ 平井金三（1859－1916）幼時父平井春江に漢籍を、のち、ドイツ語、英語を学び明治18年１月より京都オリエンタルホールを興して、同志社と拮抗して常に数百の生徒に英語を教授、姉崎正治、加藤咄堂、松山忠二郎等が門下生であった。

⑸⓪ 拙稿「折戸徳三郎英訳『怪談牡丹灯籠』」前掲書（注45）。

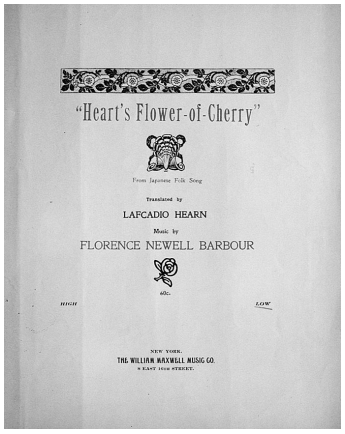
⑸① 拙稿「折戸徳三郎英訳『萬葉集』」前掲書（注45）。

［雨森信成］

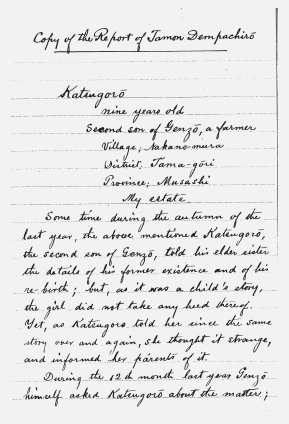
［写真46］雨森信成 山下英一氏蔵
ラトガース大学原板



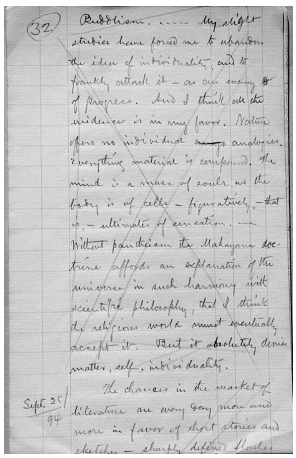
［写真47］雨森英訳の都々逸　染村蔵



［写真48］都々逸の英訳楽譜　染村蔵



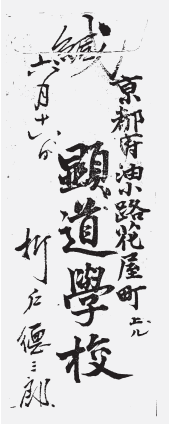
［写真49］雨森英訳「勝五郎再生記」 染村蔵



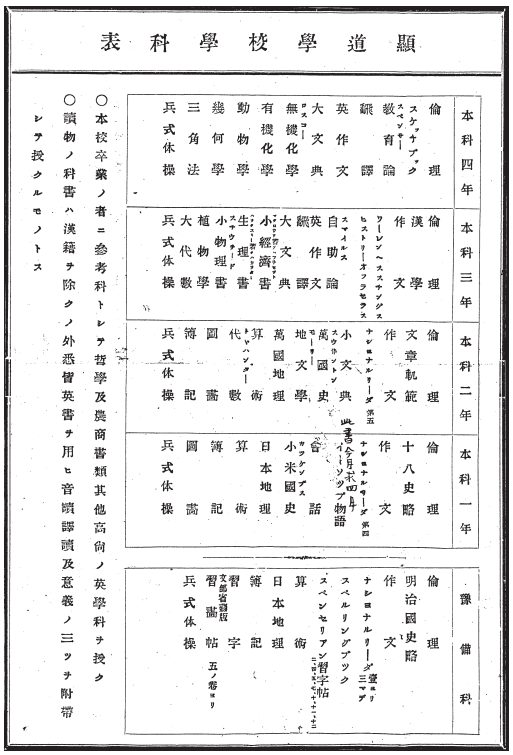
［写真50］"Lafcadio Hearn, the Man" の原稿　染村蔵

［折戸徳三郎］

［写真51］折戸徳三郎 町長時代 前列洋装の人　折戸家蔵



［写真52］折戸家蔵



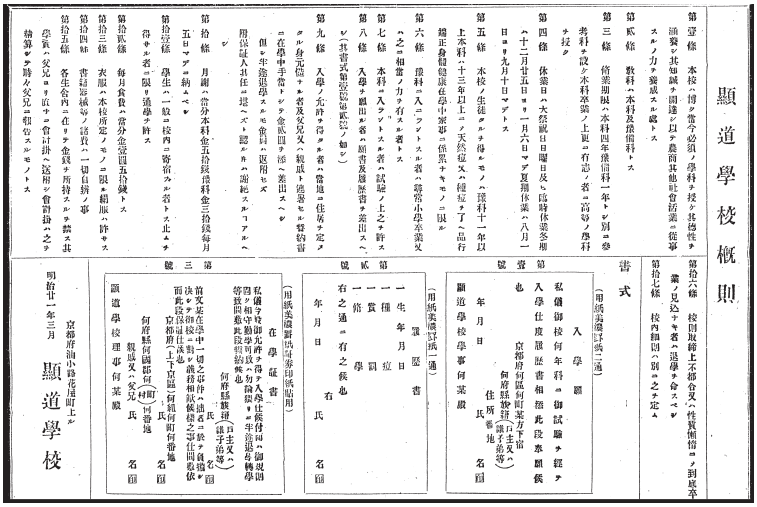
顯道學校學科表

本科四年	倫理 スケッチブック 教育論 講譯 英作文 自助論 大文典 無機化學 有機化學 動物學 幾何學 三角法 兵式体操
本科三年	倫理 漢學 作文 講譯 英作文 大文典 小經濟書 生理學 小物理書 植物學 代數 簿記 圖畫 兵式体操
本科二年	倫理 文章軌範 作文 小文典 萬國史 地文學 萬國地理 算術 簿記 圖畫 兵式体操
本科一年	倫理 十八史略 作文 小米國史 日本地理 算術 簿記 習字 習畫帖 五ノ卷ヨリ 兵式体操
課備科	倫理 明治國史略 作文 スペルリングブック 算術 日本地理 簿記 習字 習畫帖 兵式体操

○本校卒業ノ者ニ參考科トシテ哲學及農商書類其他高尚ノ英學科ヲ授ク

○讀物ノ科書ハ漢籍ヲ除クノ外悉皆英書ヲ用ヒ音讀譯讀及意義ノ三ツヲ附帶シテ授クルモノトス

［写真53］折戸家蔵



顯道學校概則

第壹條　本校ハ博ク進今必須ノ學科ヲ授ケ其德性ヲ涵養シ其知識ノ開進ヲ以テ農商其他社會活業ニ從事スルノ力ヲ養成スル處トス

第貳條　教科ハ本科及課備科トス

第三條　修業期限ハ本科四年課備科一年トシ別ニ參考科ヲ設ク

第四條　休業日ハ大祭祝日日曜日及ビ臨時休業各期ハ十二月廿五日ヨリ一月六日マデ夏期休業ハ八月一日ヨリ九月十日マデトス

第五條　本校ノ生徒タルヲ得ベキモノハ課科十一年以上本科十三年以上ニシテ矢張又ハ種短ナリトスル品行端正身體頑健學中寮則ニ服從ナキモノニ限ル

第六條　課科ニ入ントスル者ハ常ニ小學卒業又ハ之ニ相當ノ力ヲ有スル者トス

第七條　本科ニ入ントスル者ハ試驗ノ上之ヲ許ス

第八條　入學ヲ願出ル者ハ願書及履歴書ヲ差出スベシ（其書式別紙願書式貳拾錢ノ印紙ニ認ム）

第九條　入學ノ允許ヲ得タル者ハ當地ニ住居ヲ定メタル身元保證ヲ本校及父兄又ハ親戚ト連署セル誓約書ニ在學中手帶トシテ金貳圓ヲ添ヘ差出スベシ

但シ年齢退學スルモ金員ハ返用セズ

第拾條　月謝ハ當分本科金五拾錢課科金三拾錢毎月五日マデ納ムベシ

第拾壹條　學生ハ一般ニ校內ニ寄宿スル者トシテ止ムヲ得サル者ニ限リ通學ヲ許ス

第拾貳條　毎月食費ハ當分金壹圓五拾錢トス

第拾三條　表服ハ本校所定ノモノニ限リ和服ハ許サズ

第拾四條　書籍器械等ノ請責ハ一切自辦ノ事

第拾五條　各生徒ハ在リテ金錢ヲ所持スルヲ禁ス其必要ニ父兄ヨリ直ニ會計掛ヘ送附シ會計掛ハ之ヲ納算シ時々父兄ニ報告スルモノトス

第拾六條　校則ハ本科及課備科ニ通ス

第拾七條　校內細則ハ別ニ之ヲ定ム

第拾八條　校則違背者ハ退學ヲ命ズベシ

業ノ見込ナキ者ハ退學ヲ命ズベシ

第壹號　書式

（用紙壹錢五厘印紙二通）

入學願

私儀御校何年科ニ御試驗ヲ經テ入學仕度旨相紹此段奉願候也

京都府何區何町某方下宿

何府縣何郡何村何番地　住所

氏名

年月日

顯道學校學事何某殿

第貳號

（用紙壹錢五厘印紙一通）

課業願

一生年月日

一種類

一賞罰

一修學

右之通ニ有之候也

年月日　右氏名

第三號

（用紙壹錢五厘印紙二通）

在學証書

私儀今度御校ニ御入學ニ付テハ御規則ニ相守リ勤學ヲ怠ラズ品行ヲ慎ミ學業ヲ修メ等級ニ進ミ候ハヾ生徒退學願等提出致シ候也

何府縣郡何村何番地　氏（保証人父兄等）

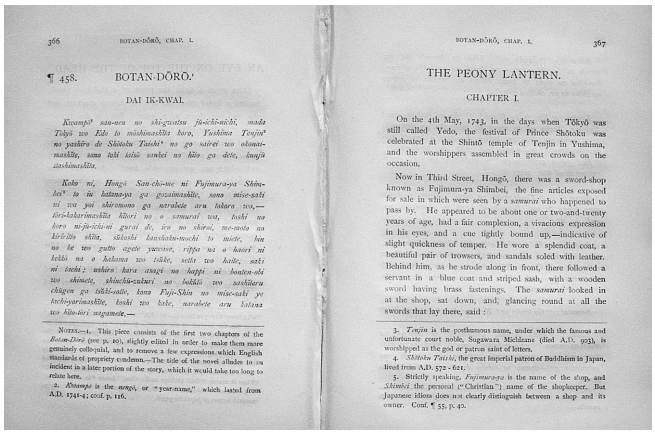
前文某儀在學中一切之保証ニ付テハ御校ニ於テ責任ヲ負ヒ決シテ御校ニ對シ或ハ御迷惑ニ相掛ケ申間敷候依而此段京都府下何區何町何番地　氏（保証人父兄等）

顯道學校理事何某殿

明治廿一年三月　京都府東路花屋町上ル　顯道學校

［写真54］折戸家蔵

[折 戸 徳 三 郎]



366 BOTAN-DŌRŌ, CHAP. I.

¶ 458. BOTAN-DŌRŌ.[1]

DAI IK-KWAI.

Kwampō[2] *san-nen no shō-gwatsu jū-ichi-nichi, mada Tōkyō wa Edo to mōshimasshita koro, Yashima Tenjin*[3] *no yashiro de Shōtoku Taishi*[4] *no go sairei wo ohomimasshite, sono tabi kōfū sōmei no hito ga dete, kunji sashimasshita.*

Koko ni, Hongō San-chō-me ni Fujimura-ya Shimbei[5] *to iū hatano-ya ga gozaimasshite, sono mise-saki ni wa yoi shō-mono ga narabete aru tokoro wo,—tori-kakarimasshita kōri no o samurai wa, hashi no koro ni-jū-ichi-ni gurai de, iro no shiroi, me-mato ni kiri-ite shita, shōshi kanshoku-mochi to mieté, kon no he wo gutto agete yaesse, rippa na o-kaori ni tekki na o hakama wo tōshite, setta wo haite, saki ni tachi; ushiro kara zangō no happi ni kōsen-aki wo shimete, shiuchū-zukuri no bokkō wo sashitaru chūgen ga tekki-sotte, kuno Fuji-Shin wo miso-saki ye tachi-yorimasshite, hashi wo koshi, narabete aru hatano wo kō-kō-kori mogamasse,—*

NOTES.—1. This piece consists of the first two chapters of the *Botan-Dōrō* (see p. 10), slightly edited in order to make them more genuinely colloquial, and to remove a few expressions which English standards of propriety condemn.—The title of the novel alludes to an incident in a later portion of the story, which it would take too long to relate here.

2. *Kwampō* is the *nengō*, or "year-name," which lasted from A.D. 1741-4; cf. p. 116.

BOTAN-DŌRŌ, CHAP. I. 367

THE PEONY LANTERN.

CHAPTER I.

On the 4th May, 1743, in the days when Tōkyō was still called Yedo, the festival of Prince Shōtoku was celebrated at the Shintō temple of Tenjin in Yashima, and the worshippers assembled in great crowds on the occasion.

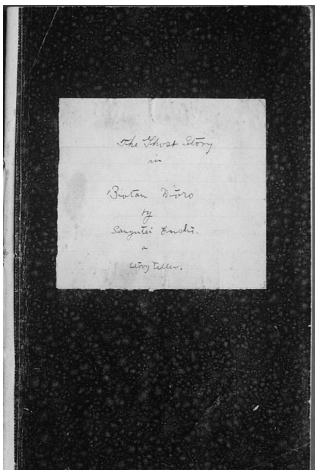
Now in Third Street, Hongō, there was a sword-shop known as Fujimura-ya Shimbei, the fine articles exposed for sale in which were seen by a *samurai* who happened to pass by. He appeared to be about one or two-and-twenty years of age, had a fair complexion, a vivacious expression in his eyes, and a cue tightly bound up,—indicative of slight quickness of temper. He wore a splendid coat, a beautiful pair of trowsers, and sandals soled with leather. Behind him, as he strode along in front, there followed a servant in a blue coat and striped sash, with a wooden sword having brass fastenings. The *samurai* looked in at the shop, sat down, and, glancing round at all the swords that lay there, said:

3. *Tenjin* is the posthumous name, under which the famous and unfortunate court noble, Sugawara Michizane (died A.D. 903), is worshipped as the god or patron saint of letters.

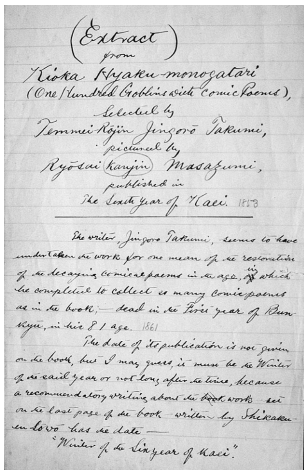
4. *Shōtoku Taishi*, the great imperial patron of Buddhism in Japan, lived from A.D. 572-621.

5. Strictly speaking, *Fujimura-ya* is the name of the shop, and *Shimbei* the personal ("Christian") name of the shopkeeper. But Japanese idiom does not clearly distinguish between a shop and its owner. Conf. ¶ 55, p. 40.

［写真55］B. H. Chamberlain, *A Handbook of Colloquial Japanese*, 1898　染村蔵



［写真56］折戸英訳『怪談牡丹燈籠』　染村蔵

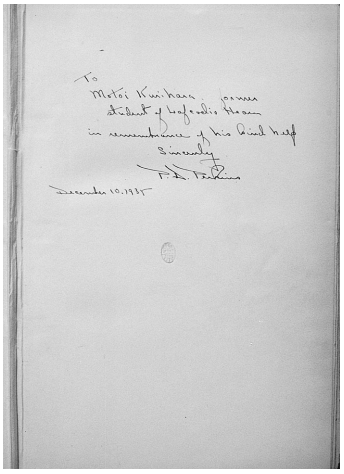


［写真57］折戸英訳『狂歌百物語』序文　染村蔵

［写真58］『狂歌百物語』染村蔵

［ P. D. パーキンズ ］

［写真59］小泉家にて1935. 8　田部夫妻とパーキンズ一家　染村蔵



［写真60］1935. 12. 10 パーキンズから栗原への献辞 染村蔵

［写真61］「小泉八雲図書館」の前にて 左から 高田力 西崎一郎 パーキンズ 妻・子、氏名不明 1936. 7. 26パーキンズ撮影　染村蔵

［写真62］前列 向って右から 木下順二 パーキンズ 藤崎八三郎とその家族 撮影場所・月日は不詳 染村蔵

Ⅴ　P. D. パーキンズ

Ｐ．Ｄ．パーキンズ　略年譜

1897（明治30）　アメリカ合衆国ヴァーモント州に生まれる。ハーン作品の書誌作成に没頭した。東京帝国大学英文学科教授市河三喜は、アメリカの P. D. Perkins に会い、書誌出版の協力を約束する。この間の事情を『英語青年』（1935. ９．１）が詳しく報じている。

1931（昭和６）　パーキンズは、来日前から大谷正信についての情報を友人から得、また、Mary M. Fenollosa （E. F. フェノロサ夫人[注52]）から、夫人が書いた “Yugiri O Kyaku San” (“The Guest who comes with the Twilight”) の原稿を書誌作成のために借りている。この作品は、ハーンが主人公で、現在、東京大学文学部ハーン文庫の所蔵である。

1934（昭和９）４．30　パーキンズ夫妻は市河三喜序文の *Lafcadio Hearn A Bibliography of His Writings,* by P. D. and Ione Perkins を北星堂から出版。

1935（昭和10）７．30　市河の紹介により、京都三高講師として来日。住居は、三高官舎。８月パーキンズ一家３名（夫妻と令嬢）は、田部隆次夫妻の案内で、西大久保の小泉家を訪問する。当日縁側で撮影された写真には、パーキンズ一家は靴カバーをはいて映っている。[写真59]　これは当時小泉家では、来訪する外国人のために靴カバーを用意していたからである。10月27日、藤井啓一とパーキンズ一家は、３日間、松江を訪れ、八雲旧居、記念館を見学する。12月10日ハーンの教え子で1915〜43 三高教授であった栗原基に、自著『ハーン書誌』を、献辞を添えて贈った[写真60]。

1936（昭和11）７．26　パーキンズ一家３名は、旧制富山高等学校を訪れ、前年５月10日落成した小泉八雲図書館（「ヘルン文庫」）の前でパーキンズ妻子、高田力、西崎一郎と氏名不詳の３先生をパーキンズが撮影する。[写真61]　この小泉八雲図書館は、松江の小泉八雲記念館と同じ山口蚊象の設計[注53]で、貴重な建造物であったが昭和37年10月、戦後の国立学校設置法による移転に伴い、取り壊された。現在この建物の写真は外に数葉が確認されているのみである。

1937（昭和12）５．27　三高官舎から富山高校の高田力に送った、パーキンズが富山高校で行うことになっていた講演の私蔵の原稿がある。題目は “Little Known Aspects of Hearn’s American Life” で、タイプ10枚である。また “The Hearn Library at Toyama Kotogakko” のタイトルで、タイプ原稿３枚がある。富山高等学校が発行したパンフレットと内容が同一であることから、両者とも no date であるが、このパンフレットはパーキンズの原稿によったことが分かる。

1940（昭和15）４．４　私蔵のパーキンズ発信の手紙の中に、「外務省情報部パーキンズ」と書いた手紙がある。日米開戦前年であり、パーキンズがどのような立場にあったのか、気になる肩書である。５月４日、パーキンズは龍田丸でアメリカへ帰国。ニューヨークの日本総領事館に勤務。『来日西洋外国人事典[注54]』、『小泉八雲事典[注55]』では、1941年10月、駐米大使、野村吉三郎が渡米した際随行したと記しているが野村大使は、1941. 1. 23 横浜港を出港している。私蔵のパーキンズの1940年７月６日付手紙は、アメリカの South Pasadena から日本の知人へ宛てたもので、野村大使の渡米以前に、パーキンズは帰米している。パーキンズは太平洋戦争直前、日米間を何度か往復したのであろうか。

1948（昭和23）６．１　パーキンズは単身で再来日。京都に住み、パーキンズ・オリエンタル・ブックスを設立し、アメリカにいる夫人と連絡をとりながら、洋書の輸入販売

をした。

1949（昭和24）４．20　来日後初めて、市河三喜から来信。戦時中に夫人が亡くなったこと、来年はハーン生誕100年祭で、研究社からハーンに関する本を出版するので力を貸してほしい、というものであった。

1950（昭和25）　松江で行われた小泉八雲生誕百年祭に出席。

1953（昭和28）８．25　パーキンズから友人への手紙によると、この頃パーキンズ所蔵のまとまった本や原稿が、天理大学に売却された。

1963（昭和38）　京都市岡崎の自宅でＰ．Ｄ．パーキンズ逝去。戒名は、「万松院浄誉緑山居士」。『来日西洋外国人事典』(注54)による。

（注）52〜55

(52) Mary McNeil Fenollosa（1865－1953）ハーンはフェノロサ夫妻が日本に滞在中、一時期、親しく交際していた。フェノロサ宛書簡が２通、メアリー宛が３通残っている。

(53) 拙稿「ヘルン文庫の探究」前掲書（注18）。

(54) 『来日西洋外国人事典』日外アソシエーツ．1995．１．31。

(55) 『小泉八雲事典』恒文社、2000．12．31。

おわりに

昨年、金沢大学資料館から特別展、講演と本稿執筆の依頼を受けた。三好義昭資料館長をはじめ、資料館員の在田則子氏、田嶋万希子氏のご協力をいただいた。また資料の調査については、金沢大学附属図書館の皆様のご教示をたまわった。ここに深謝の意を表する。

2001．２．９．© 染村　絢子